

特38

562

館藏書會育教本日大			
二	二	一	一
册	七	四	七
	六	架	函
	號		

渡邊龍潭著

佛國真天談第一編

世界一變論部

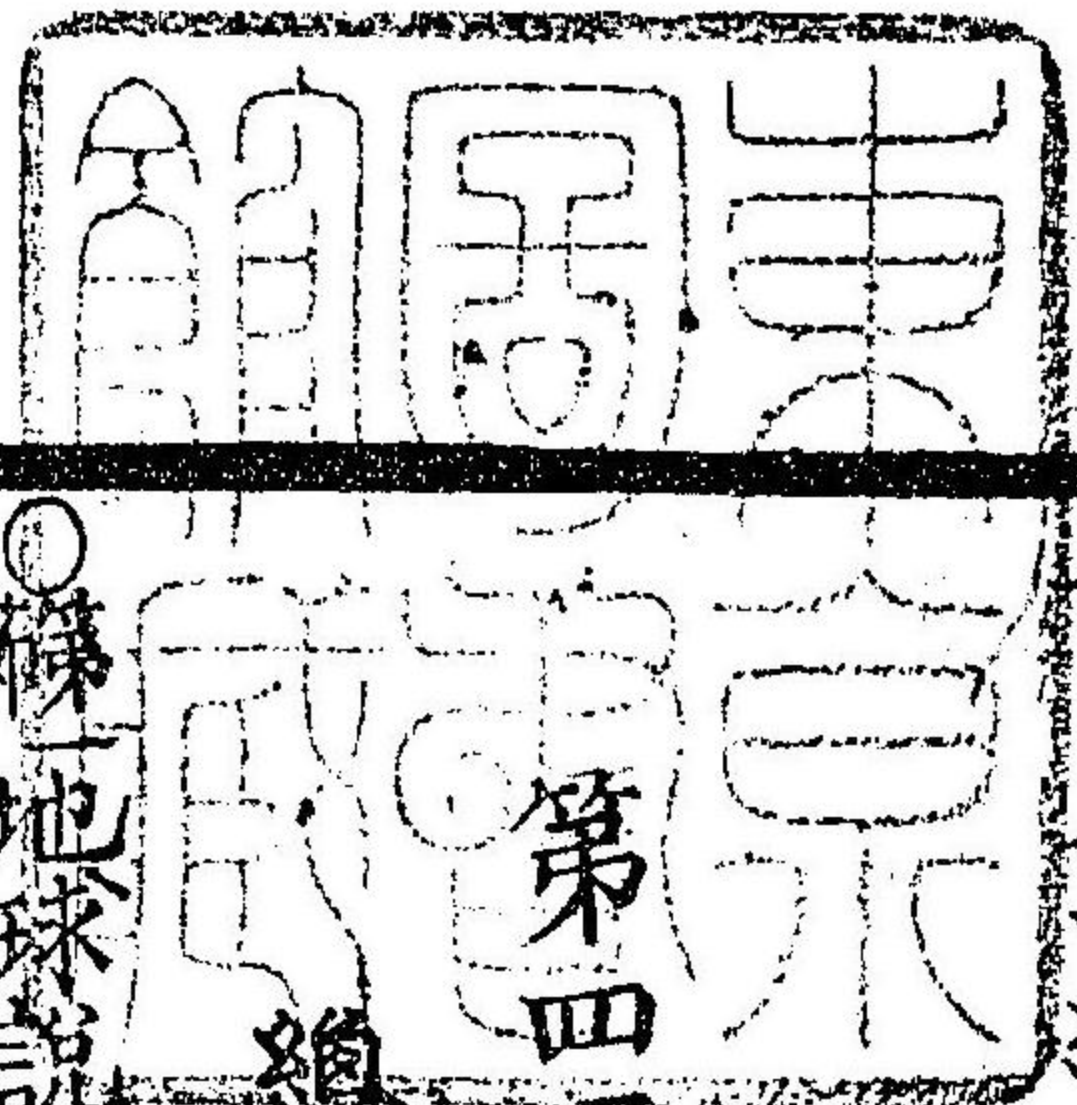
末

世界一變論下

真宗太谷派二等教師藤井最證閣 渡邊龍潭述

第四項 大科第三 決論地球說之可非

總論



○聯地球說ノ組織タルヤ上卷ニ於テ説明セシ如ク一世一人ノ經營ニアラス彼ノ  
 西人ノ好譎ナル數術ト理學トヲ以テ漸ク改作シ倍々巧造セシモノナレハ殆  
 ント瑕疵ナキカ如シト雖モ憐ムヘシ井蛙ノ僻見只眼前ノ視象ヲ執シテ  
 天地ノ真體ヲ知ラス一是レ又首唱者ノ假設セシ想像心說ヲ以テ真成ナル  
 天象ト誤認セリ是レニ蓋シ彼ノ一犬虛ヲ吹テ万犬實ト傳フルノ意將又大陽ト大陰トハ宇宙間必對ナ  
 ル匹敵者タルコトヲ知覺セザル妄見三ヨリ捏造セシモノナレハ固ト

言本之性ニモ足ラス一回ヒ其妄ヲ排キ其誤認ヲ正シ其蛙見ヲ論  
サハ則チ天地ノ真象ニ於テ直チニ一旦豁然タラシム

○第二夫レ人ハ氣中ニ生活スルコト猶鱗介ノ水中ニ於ケルカ如ク氣外  
ニ在テ生ヲ保ツ能ハサルコト亦猶魚ノ水外ニ於テスルカ如シ而シテ魚類  
ハ且或ハ水外ニ跳リ或ハ他ニ携提セラレテ偶々氣中ヨリ水裏ヲ瞥  
視スルコトモアレドモ人ニシテ誰レカ氣外ニ控ヒ誰レカ日月ノ國ニ旅  
行シテ現サシクハ氣外ヨリ氣中ヲ瞰視シ地ノ全體ヲ一眸子ニ容レ  
且全天ノ星體ヲ洞視スルコトヲ得ニヤ單ニ氣中ニ生息シテ氣  
中ノ視象ヲ測望スルニ過キサルナリ雖然茲ニ能ク氣ノ内外ニ出入シ天外  
ニ昇降シ盡虚空ヲ徹視スル者アリテ其説ク所悉ク徴効アルトキハ豈

之ヲ信ゼズシテ可ナシヤ自己ノ所見々ニ執執シテ他ノ言フ所ノ説ニ於テ總之ヲ  
信ゼザルヲ井底ノ蛙見ト云フ固トニ憐ムヘキナリ

○人ノ氣圍氣外ニ出ル能ハサルコトハ全世界ニ異論ナシ又誰レカ能ク  
氣ノ内外ニ出入シ能ク天地ニ升降セシ者ゾ曰ク我カ佛世尊及ヒ其他  
ノ得通者一般是ナリ問フ其説クトコロニ徴驗アリトハ何ゾヤ曰ク代  
所説ノ佛教悉皆徴効アラサルハナシト雖モ所謂大聲俚耳ニ入ラズ  
ノ風情ニテ高尚ナル佛理ハ今ノ所談ニ適セス最モ賤劣ナル西洋ノ理  
學中ナル地球説ニ對シテハ則チ夫レニ相應セルモノ即最モ簡單ナル現  
証ヲ以テ論サルヲ得ス

○人ハ一滴ノ水中ニ甚々多キ小蟲ノ生活スルヲ素眼ニテ睹得サルコト

ハ天下亦異論ナカルヘシ然ルニ我カ佛世尊ハ悉ク之ヲ照見シテ深ク  
 此小動物ヲ哀愍シ玉ヘリ未タ顯微鏡無キ世ニ通得者ノ外此小蟲ヲ一  
 人モ見ルヘカラサルヤ明カナリ而シテ今現ニ一回ト顯微鏡ヲ執テ之ヲ檢ス  
 ルトキハ則テ無學ノ田夫野婦モ之ヲ睹ルコトヲ得三尺ノ童子モ皆能ク  
 之ヲ明知シ得ルトキハ是レ其所説ノ徵効アルモノニ非スシテ何ヤ下ニ詳ニ  
スルカ如シ  
 ○我佛世尊ハ印度ニ生誕シ印度ニ入滅シテ五大洲ヲ經歷シ玉ハザリシコ  
 トハ則テ西人モ能ク知ル所ナリ然ルニ世尊説置キ玉ヒシ五大洲其他嶋嶼  
 ノ負數大小形狀等共ニ西人ノ經驗スル所ニ恰モ符節ヲ合スルガ如ク  
 直毫モ異ナルコトナキトキハ是亦其所説ニ徵信アルモノニ非スシテ何ソヤ亦下  
ニ詳  
ニスル世尊ハ其地ニ到ラスシテ之ヲ知リ鏡カヲ藉ラズシテ之ヲ省ル亦

尊カラスヤ誠ニ信仰スヘキナリ

此地天文學地質學等ニ付佛説ノ徵効按テ違アラスト雖モ今畧之

○眼前水中ニアル所ノ小蟲ダモ見ル能ハズ何カニ況ンヤ一須弥界ノ真  
 象ニ於テオヤ今ノ地球家ハ素眼ヲ以テ之ヲ檢シ水中ニハ蟲ナシ  
 只水ハ清潔ニシテ雜物ナキモノト謂ヘル者ノ如ク又閻龍武斯  
 ノ發見以前ハ吾カ眼ニ見ルコト能ハサルヲ以テ亞米利加無シト論セシ  
 者ノ如シ亦蛙見ナラスヤ亦閔然ナラスヤ是ヲ以テ予カ此編ヲ著述  
 スルヤ此昭明ナル真説ヲ以テ彼ノ蛙見者ノ胸膈ヲ頓ニ開濶シテ井中  
 井外ノ情ニ明カナラシメント欲スルニアリ

○第三總シテ支那天動ニマレ西洋ノ地動説ニマレ所謂地球説ナルモ  
 ノハ是レ皆無根ノ妄説ナリ何ントナレハ先ツ確証ヲ得テ而ノ後ニ發シ

タルモノニアラズシテ只古説ノ甚ク不便ナルニ由リ假リニ設ケタル想像説ナレハナリ上卷ニ陳述遙カ後世ニ至リ地圖ニハ此ク確証アリ地動ニハ彼ノ確証アリトセシカ嗚呼ノ説ヲ主張スト雖モ元來彼ノ首唱者ハ此ノ憑証アリ地球説ヲ立テタルモノニ非ス况シヤ後人言フトコロノ地圖地動ノ確証ナル者ハ一モ其証ニ非レハナリ

○コロンブス閣龍氏ガ亞米利加ヲ檢出スルヤ最初阿非理加洲喜望峰阿非理加ノ南端ニアル高名ナル岬ノ西岸ニ於テ見慣レサル人物ノ死骸ノ流著セシヲ見テ三大洲亞細亞阿非理加歐羅巴西ニ於テ尚ホ島洲ノアルヘキヲ主張シ其後航海ノ末西天ニ當リ中夜火光ノ發スルヲ望ミ且草木ノ艦邊ニ流レ來リシヲ見テ彌々亞米利加洲ノ近キニアルコトヲ決定セシハ則チ是レ至論ト謂ツヘシ何ントナレハ

キニ見タル人屍火光草木ハ後ニ必ス鳩洲ヲ檢出スヘキ確証ナレハナリ  
蓋シ閣龍武斯バ伊太利亞國熱努亞人彼ノ一千四百五十九年即チ吾カ長祿三年ニ生レテ一千五百十九年即チ吾カ永正十六年行年六十一ニテ卒ス始テ亞米利加洲ヲ檢出セシハ吾カ明應三年甲寅ニアリ今明治十八年迄ハ三百九十二年ニ相成ル最初亞米利加實檢ノ議ヲ其國王ニ建スト雖モ用井ラレス英國ニ説テ仍採用サレス大ニ困難ヲ窮メシカ終ニ西班牙國ノ女王ニ謁シテ始テ其議ヲ容レラレ因テ此ノ大功ヲ奏セリト云フ

○去ル明治五年ノ海外新報ニ東京日日新聞第百三十一号ニ載スセルマン一等天文博士ノ考フルニ日本本年七月初旬西洋八月中旬ニ彗星中外ニ出テ右

モ火性ニシテ必ス衝突シテ地球ヲ破壊セントノ説ヲ記載シ又明治十  
 四年ニ人人ノ皆知ル所ノ如ク西人ノ説ニ當年十月十五日ハ地球粉  
 碎シ全世界ノ人物悉ク死滅ノ時ナリト云ヒ又去ル明治十五年ノ時  
 事新報第二百二十号ニ載スル所ノ説即英國倫敦ロンドンノ天文學士ノ考ニ明年即  
 年十六火性ノ彗星出現シ太陽ト密接スルガ故ニ引カノ為ニ彗星ハ太陽ニ引  
 キ付ケラレ太陽熱ハ増熾シテ且其引カモ強クナリ吾人ノ地球モ為ニ  
 顛覆スルト云フ測量ナリト云フカ如キハ即チ皆無根ノ妄説ナリ何ントナ  
 レハ先キニ一ノ確証モナクシテ只暗推妄想セシ仮説ナレハナリ  
果シテ今仍大地ノ依然タルニテ談説ノ無根妄説ナルヲ知ルヘシ  
 ○既ニ先ツ確証ヲ得テ而シテ後發セシモノハ至論ニシテ一モ確証ナクシテ  
 先ツ暗推仮設セシモノハ妄誕ナルコトヲ知ルヘシ故ニ予ハ地圓地動ノ説

ヲ以テ斷然無根ノ妄説ト為スモノナリ而シテ此ノ地球説首唱者ノ意旨  
 ヲ誤認シテ地ハ實ニ圓ナリ且實ニ回轉スルモノゾト信スル者ノ如キハ則  
 チ奚ソ彼ノ万犬實ヲ傳フルモノト分タシヤ又彗星ノ大地ヲ顛覆シ一日間  
 ニ人類死シタラスノ説ヲ真實ナリトスル者ノ如シ

○市川團十郎カ仮リニ愛セシ八重垣姫ヲ見ヨ又小照西京夷症ノ女伴優カ仮リニ愛  
 セシ武田勝頼ヲ見ヨ其麗孌美男滿場ノ士女ヲシテ毎ニ涎ヲ流カサ  
 シム此ノ仮象ヲシテ真ナリト誤認セハ團十郎ハ夫レ女ニシテ小照ハ夫レ  
 男ナラシ予仮裝ヲ以テ真體ヲ謬ラハ人將タ之ヲ何ニト云ヒヤ今テノ  
 地球家ハ實ニ團十郎ヲ女子トシ小照ヲ男兒ト為ス亦惑足甚キヲラヤ  
 ○是ニ因テ予ノ此著アル團十郎小照ノ男女ヲ決判シ地圓地動ノ確証

ト唱フル所ノ者ハ閣龍氏カ主張セシ亞米利加アリト云確証及ヒ彗星  
大地ヲ粉碎スルト云フ確証ト孰レカ是ナヤヲ決論セント欲スルニアリ

○<sup>第四節</sup>近頃ノ化學者ハ万物ノ元素ヲ其數六十五アリト云フ然レ其

性質ハ唯ニ曰ク陰ト陽トナリ抑ク陰陽ニ氣ノ匹敵タルヤ金石ノ如キ

無機物ニ於テハ未ダ其性明著ナラスト雖モ動植ニ体ノ有機物ニテ

食ニ手足有テ運動シ上下分定マリ表裏ノ位分カ  
物之有有機物云此能ク此分定マニナル物之ヲ無機物ト云フ於テハ之ヲ男女ト云ヒ或ハ

雌雄ト云ヒ或ハ牝牡トモ云ヒ甲アレハ必ス乙アリ乙有レハ必ス甲アリ

テ陰陽ハ決シテ孤立セシテ必ス對生ス是宇宙間ノ一大定規多

故ニ之ヲ必對ノ匹敵物ト名ツク亦彼ノ電氣力ニ二性アリ磁石力ニ

性アリ等皆是レ陰陽ノ三ツチリ

○彼ノ光炎赫々タル太陽ハ吾人生活スル所ノ世界中最大至要ノ太陽物

タルコトハ天下悉ク知ルトコロナリ設除シ太陽無カリセハ天地間ニ光熱ハ

絶テ無カルヘシ夫レ天地間ニ絶テ光熱ナキトキハ吾等人類ヲ始メ一般

ノ動植物ハ如何シテカ能ク保存スルコトヲ得ンヤ是レ此世界アルトキ

ハ太陽必ラス無クシハアルヘカラサル所以ナリ而シテ此太陽物アリテ之ニ

匹敵スル者ハ果タシテ何物ソヤ右論スル所ノ宇宙間ノ定則ニ據

ルトキハ必ス大陰物無クシハアルヘカラス

○故ニ宿曜經ニ曰ク天地初建寒暑之精化為日月鳥兔抗衡生成万物分宿

設宮管標群品日理陽位乃至月理陰位又古事記太安萬侶方序ニ云ク臣安

萬侶言夫混元既凝氣象未效無名無為誰知其形然乾坤初分參神作造

化之首陰陽斯開二靈為群品之祖下是レ吾カ佛教ニ於テモ又我カ 皇國ノ古  
 傳ニモ總テ日月ノ二ヲ以テ宇宙間ノ大陽トシ大陰トス又同床ニ論スヘキモ  
 ノニハ非レ臣彼ノ耶蘇者ノ奉スル舊約書創世記ニモ神造ニ巨光大  
 者司晝小者司夜又造衆星神置之於天之穹蒼以照天地俾司晝夜分  
 光暗ト云フ然レハ何レノ道ヨリ談スルモ皆悉ク大陽ノ匹敵ヲ月トス是レ  
 固トニ然ラサルヲ得サル所ナリ况シヤ實地ニ於テ日ハ真ニ大陽ノ徳ア  
 リ月ハ正ニ大陰ノ徳アルニ於テオヤ

○然ルニ地球家ハ大陽アルヲ知テ大陰アルヲ知ラス蓋シ物眼前ニアルト  
 モ之ヲ見ルコト能ハサルヲ盲目ト云フ西人ハ茲ニ於テ夫レ盲人ニ哉  
 盲目者尚憐ムヘシ然レトモ一盲目衆盲目ヲ引卒シテ宇宙ノ定則ヲ紊

亂シ日月ノ天ニ懸レル所以ヲ失ヒシヨリ天地ノ定位ヲモ失シ地ヲ球圓ト為  
 シ人ヲシテ逆マニ立タシノ或ハ横ニ附著セシメ日月ヲ瓦礫トシ天地ヲ亂弄  
 物トシ竟ニ地動說ヲ主張スルニ至レルハ決シテ許スヘカラサル所ナリ

○月ニ大陰ノ徳能アルコトハ我カ佛教ニ於テ前ニ掲ケシ宿曜經及

白王

國ノ古傳即チ古事記序ノ一文ニテモ判然タリト雖モ西人ノ未タ之ヲ  
 通知セサル所以ハ彼レ深ク茲ニ精神ヲ殫クサルニ因ル百事ニ於テ  
 毎ニ陽事ハ見知シ易ク陰事ハ見知シ難シ故ニ月徳ノ日徳ノ如  
 ク常ニ顯著ナラサルハ良トニ由縁アル哉然レトモ精細ニ之ヲ觀察ス  
 ルトキハ必ス知リ難キニアラサルヘシ

○大陰ノ夜間大陽ニ代テ天地ノ黑暗ヲ照明シ或ハ海洋ノ潮汐ハ月ノ昇



降ニ因テ下滿シ又海中ノ動植物ハ悉ク月ノ盈缺ニ因テ肥瘠消長スルコト  
ハ世人ノ能ク知ル所ナリ是レ皆大陰ノ徳ノ月ニアル現証ナリ○然シテ過  
日月ノ能力ニ付キ一新報ヲ得タリ即京都繪入新聞第三百壹號  
雜報欄内ニ記載セリ曰ク太陽ノ光線カ植物生長ニ必要ナル事ハ世人  
皆知ル所ナルカ月ノ光線ハ素ト稀薄ナルヨリ植物ト關係有ル事ヲ知  
ル者ナカリシカ此ゴロ佛國人ミユヅモ氏ハ月光ノ植物ニ關係有ルヤ否ヨリ  
試験シテ一ノ新發明ヲオシタリ向<sup>ビ</sup>葵ノ朝ニハ東ニ向ヒ夕ニハ西ニ廻ル  
如ク月ノ光ニ伴フテ植物ノ廻轉スル事ヨリ心付キ同氏ハ菜豆<sup>エビ豆</sup>ノ  
如キ最モ光線ニ感シ易キ植物ノ種子ヲ植木鉢ニ播キ其甲析<sup>ナ</sup>  
レ二三寸ハカリニ長スルマテ常ニ暗キ所ニ置キシニ莖葉嫩弱ニシテ萎<sup>キ</sup>

黄色ナリシ因テ同氏ハ此植木鉢ヲ取リニ晚續キテ月ノ明キ夜庭へ出シテ  
月光ニ觸レシメ細カニ點檢シタルニ植物ノ月光ニ觸ル、ヤ直チニ廻轉シテ  
大陰ニ向ヒ其運行ニ從テ漸次ニ西ノ方ニ廻ハリ大陰西山ニ没スレハ植物皆  
其ノ元ノ所ニ復シ大ニ勢色ヲ增長セリト云フ九レハ從來全ク關係ナキモ  
ノト認メタル月光モマタ植物ノ生長ニ多少ノ影響ヲ及ボスヲ知ルヘキナリ  
以上新聞  
紙面ノ文ト是亦月徳ノ一端ヲ見ルヘキモノナリ後必ス月徳ニ就キ大ニ檢出  
スル所アルベシ

○故ニ予ハ此編ニ於テ日月星辰ノ形體及ヒ懸天ノ然ル所以ヲ陳述シ以  
テ天地ノ定則ト定位トヲ正シ地圓地動說ノ妄見ヲ辯明セントス

第五項 論地動說

○第五節 既ニ上卷ニ於テ地球說ト地動說ノ起源及ヒ其變革ヲ略述セリ人々地動ハ天動ヨリ捷便ニシテ且地球說ノ甚々巧ミナルヲ知ラン再言スレハ地圓ト地動トノ淵源ヲ説明セリ因テ本卷ニハ迦上式ニ據リ初ニ地動說ノ可非ヲ決論シ次ニ地圓說ヲ決論スヘシ

○地動說ハ日耳曼ノ僧歌白泥ノ創造ニシテ天動ニ比スレハ論說ト算數トニ於テ甚々捷便ナル所アルヲ以テ之ヲ首唱シ其後刻伯爾奈端等カ引カ求心カ遠心カ等ヲ以テ之ヲ修飾スルニ至テ殆ント大成セシ事ハ前ニ陳述セシ所ナリ○蓋シ地動ハ元ト地圓ヨリ起リ上卷ニ記スルカ如シ地圓ノ說ハ只見前第二節ニ論セシカ如ク井蛙ノ癡見五口カ肉眼ノ所見ヲ以テ強テ之レカ臆斷ヲ為

セシ後ニ弁スルカ如シ而シテ地動說ハ其首唱者即ズベルガ所說ニ就テ之ヲ計西敷スルトキハ其仮設セシ者ナルコト甚々明カナリ然ルニ後世ケフレル共ニ奈端等カ引カナトヲ以テ其說ヲ修飾セシハ則チ第三第四兩節ノ意ニシテ即チ團十郎ヲ真女トシ小照ヲ真男トセルモルニシテ今世地動說ヲ信スル者ノ如キハ亦猶團十郎ヲ娶テ家室ト為シ小照ヲ迎テ良人ト為シテ交會セント欲スル者ナラサルヲ得サルナリ之ニ因テ予ハ初ニ歌白泥ガ說ノ仮設ナル所以ヲ明シ次ニ該說ヲ修飾シ且之ヲ信スルモノハ團十郎ヲ妻トシ小照ヲ夫トセルノ誤リナル事ヲ辯シ終ニ地動ノ確証ト称スル者ヲ辯駁スヘシ

○轉地動說ノ仮設 最初ベルガ地動說ヲ主張ヒシハ彼レガ確信ヨリ出タルニアラス仮設セシ者ニテ俗ニ云フ五口カ虚言ハ何處迄通ルヤ

ヲ試験スルノ説ナルコト明カナリ何ントナンハ尤ノ四事ヲ以テ彼レカ意中ヲ瀉  
 真シ得ヘケレハナリ○第一 歌白泥ハ地動ノ確証ヲ論セス蓋シ愚夫愚婦ハ措  
 テ論ヒス苟モ天文地理ヲモ談セント欲スル者一ノ憑証モナクシテ豈深ク之ヲ確信  
 センヤ現ニ刻伯爾奈端等カ如キハ引力及ヒ運動ノ法則等ヲ考定シテ之ヲ憑  
 據トシテ地動ヲ信セリ近世フーコトル氏カ如キモ亦之ニ類ス然ルニコペルハ  
 地動ヲ首唱スト雖モ未タ嘗テ一ノ憑証ヲ掲ケス何ノ憑據モナクシテ而モ之ヲ  
 主張ス是豈自ラ信スルノ説ナランヤ○第二 後世言フトコロノ運動ノ法  
 則及ヒ引力求心カ遠心カ等ノ如キ地動ニ關係セル要目ハ歌白泥カ曾テ知ラ  
 サル所ナリ而シテ若シ是等ノ要件ナキ時ハ地ノ回轉スル理ハ斷然立タサ  
 ルモノナリ 是等ノ要件有モ猶地動ノ理ハ立ツヘカラス況ニヤ無ニ於オヤ此要目ヲ知ラスシテ地動ヲ主張セルモノ

豈能ク確信セル所ノ説ナランヤ○第三 コペルガ地ヲ球圓ト為シ及ヒ他ノ遊  
 星ト同類ナリト為セルモノハ皆ナ仮リニ設ケタル説ナリ其故ハ當時尚航  
 海ノ道廣ク開ケス且器械モ甚タ疎ナリ 望遠鏡ノ如キハ伊太利國分リレオ公來ノ故ニ發明ニシテ歌白泥カ歿セシ後ノコトナリ  
 地圓ノ説ニ於テモ一モ實驗セシ確証ナシ只日月水中ヨリ出沒スルノ説ヲ疾ク  
 ニテ仮リニ地圓ヲ主張セシモノナレバナリ地圓既ニ確信ノ説ニ非サレハ地動ノ  
 仮設ナルヤ辯ヲ待タスシテ明カナリ○第四 當時多祿某ノ天動說甚  
 タ疎漫ニメ地動ヲ立ルトキハ大ニ天動ノ煩難ナルモノヲ省約スルトコロア  
 リ故ニ一モ地動ノ確証ナシト雖モ 地動ノ確証ナシトハ別ニ持テタスト雖モ當時一向採用スルモノナク加之罵詈雑言シ賤シラレタルニテモ亦知ルヘシ洛氏天文  
學ニ云ク即チ此人ノ各ヲ冠ラシテコペルニキエスノ方法ト稱ス然レトモ當時ニ在テハ  
 大ニ愚直ヲ受ケ世間皆其説ヲ誰クナラス或以テ狂ト為ス或以テ天道背者 為ス至ル 仮リニ設ケテ自己ノ  
 或ウケバロントセシヤ疑ナシ否ラサレハ自己信スル所ノ憑証ヲ掲出スヘケ

レハナリ是ヨ以テ之ヲ觀レハ即彼ノ一犬噓ガ大吼一聲ニ外ナラサルモノナリ  
上卷下參觀 然ルニ刻白尔奈端カ輩此虚説ナルコトヲ察セスシテ之ヲ眞實  
トシ妄ニ運動法則ノ引カノ云モノヲ設立シテ之ヲ修飾シ地圓地動ノ説ヲ  
称賛スルハ固トニ彼ノ万犬カ實ヲ傳フルモノニシテ亦團十郎ヲ眞女ト  
シ小照ヲ眞男トスルモノナリ亦隣ハヘキニアラスヤ

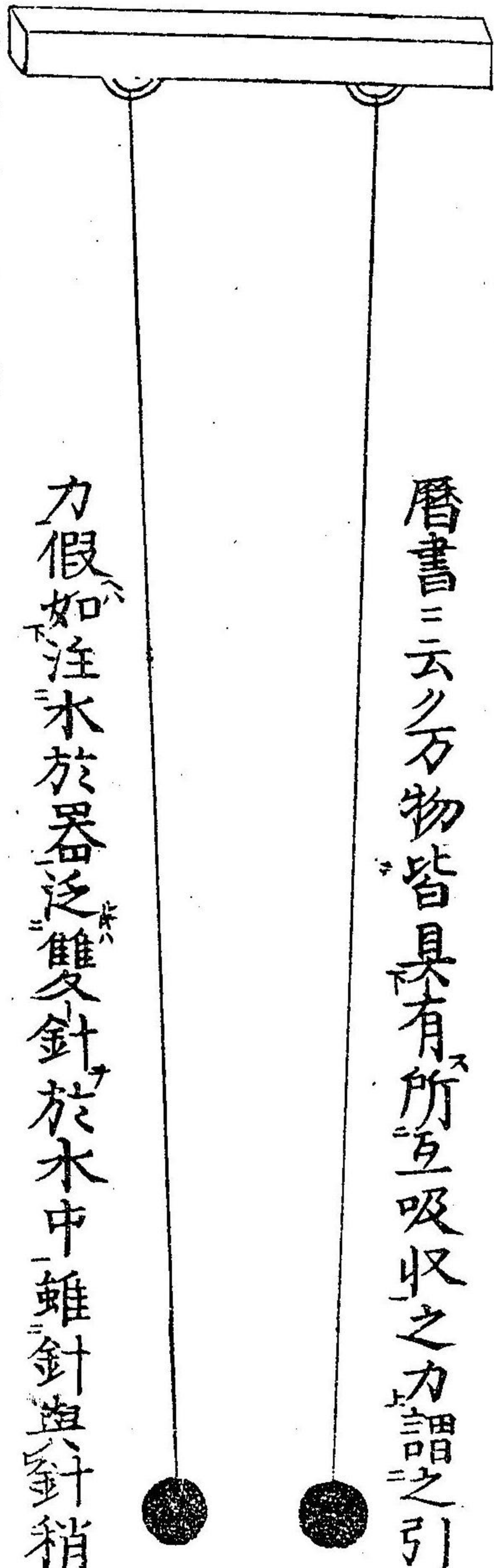
○第七節 引カ 新法曆書續編卷二十七ニ云ク引カ説者創於西士第谷及刻  
白爾成於奈端以為近相取テ而附著者烏莫物不有此惟謂之引カ其體  
堅實而重者雖小引カ強其體浮虚而輕者雖大引カ弱万物莫不附  
地心落者比地球引カ之所使而又謂之重力此則地球之體堅實而引カ  
強而為自轉所以為立圓體也万物之體輕小而引カ弱故見地球引カ

物而不見万物引地球也是以世人知有重力而不知有引カ其實重力亦地  
球之引カ使之然耳其不見万物互相引者亦地球之引カ強而相引之カ為  
之衰弱而不見其象也蓋万有之為物皆至微至細之同質聚織粘合而  
成者其所以聚織粘合即引カ耳若無引カ則万有渾不有始為其形体  
也凡万物為地球所引而各拱地心謂之求心カ七曜亦各有引カ而為自轉所  
以為立圓體惟太陽其體緻密而最大故諸曜皆為太陽所引謂之中心カ夫  
然故亦皆有拱太陽之求心カ而各自生輪環行度而諸曜亦猶地球引万  
物交互相引所以生諸小均及最高正交之變動也夫諸曜為太陽所引  
動機一發自有迴轉之動猶地上轉丸則行動而自能迴轉迴轉則自有樞  
軸而為兩極也若諸曜不為太陽所引則當各從其本天之切線而直進

行故由中心力與直進力而更生遠心之勢謂之遠心力云ト而シテ其万物ノ引カアル憑証多種アリト雖モ最モ簡易ナルモノヲ示サ九圖ノ如ク二箇ノ金屬球ヲ釣繩スルトキハ兩球ノ相近ツクニテ知ルヘシト云フ又新法

曆書ニ云ク万物皆具有所互吸收之力謂之引

第九圖



力假如注木於器泛雙針於水中雖針與針稍隔輒能吸引合著ト○又遠心力ノ憑証ニモ數種アリテ最簡ナルモノハ彼ノ傘ノ柄ヲ執テ之ヲ旋廻スルトキハ傘上ノ水滴皆傘外ニ飛散スルヲ以テ一証ト為ス或ハ繩ノ端ニ石ヲ繫キ他端ヲ執テ空中ニ之ヲ

旋舞センムルトキニ際シ設シ繩ヲ截斷ヒハ石ハ乃チ遠處ニ向テ飛散スルヲ以テ又遠心力ノ一証ト為ス

○第八節 引カ等ヲ以テ天象ヲ談スルハ附會ノ說ナリ 蓋シ求心遠心等

ノ諸カハ縱令ヒ眼前地面上ノ物體ニ於テ其現存スルアルモ此理ニ據テ諸星ガ太陽ノ周圍ヲ廻轉スル活動器ヲ製造シテ實地ニ試驗シ能ハサルモノナレハ必竟附會ノ空說ニシテ決シテ論スルニ足ラサルモノナリ何ントナレハ前ニ掲ケシ新法曆書續編ノ文中夫レ諸曜太陽ノ為ニ引カレ動機一發シテ自ラ廻轉ノ動アルコト猶地上ニ一丸ヲ轉スルトキハ行動シテ自ラ廻轉スルカ如シト云ヒ其他求心遠心カノ現存ヲ云フガ如キハ皆ナ固ニ實地ニ試驗シ得ベシ今夫レ地

諸曜徑比例表

土星	木星	火星	金星	水星	太陰	地球	太陽	自地中距視徑	自太陽視徑	實徑	實徑里數	最高本天半徑為一地半徑
五〇	一〇三四五	二〇七八	四五八三	一九四四	五九一六七		五三三八八九	分秒	分秒	個	里	個
四七六九四	五三八〇六	三一六四	四五八三	一九四四	一二八九四四	四七七八				三七九	三六一一九三	二四三八六
九九八二五	二二六〇二	〇六六二八	〇九五九三	〇四〇七〇	〇二六九九	一						
三二二五三	三六三八二	二一四二	三〇九九	一三一五	八七二	三三三一						
二四一二九三	一〇三〇七九九	三九九四五	一七四七〇	一一一九三	六四							

二六二三〇	一八六九八	三三二四一	一七二二五	七三七五			二三五八〇	個	自轉一周	立積	物質粗密	物質
〇四二八〇	〇四一四〇	一〇二七〇	〇九七三〇	一	五六二七	〇九七三三	二五五〇	日	一個	一個	一個	一個
八六七九五〇	一二四六〇	〇二五四〇	〇七九八六	〇五八八一	〇〇三三四	〇〇三三四	一二一七四八	個				
〇九〇三二〇	〇二三一四七	〇七二九二〇	一三七四九〇	二〇三七七〇	〇六八七〇六	〇六八七〇六	〇二五二八五	個				
七八三九〇	二八八四〇	〇一八五二〇	一〇一八一八	〇一一九八〇	〇〇一三九九	〇〇一三九九	三〇七八三一	個				

球家ハ右表ノ如ク諸曜ノ大小距離物質及ヒ物質ノ粗密且廻轉ノ速力ニ至ル迄知テ識ラスト云フコトナシトス設シ果タシテ然ラハ彼ノ化學局ノ合藥法ニ準シ最小ナル日月星辰ヲ製造シ天ノ距離ニ比例シテ之ヲ環列シ一回運動力ヲ與フルトキハ此人造諸曜ニ於テ天造諸曜ニ均シキ運動者ルヘキ理ナリト雖モ古今未タ此試驗ヲ為セシ者ナク今未來此ノ試驗ヲ為遂ケ得ヘキモノニ非レハナリ

○地球家或ハ謂ハシテ合藥法ニ據ルトモ天造ニ均シキ物体ハ入得テ造ルヘキニアラス且地面ニ於テハ地ノ大引カト空氣トノ大障礙物アルヲ以テ斯ル試驗ヲ為スヘキ理ナシト今日ク然ラス先ツ便宜ニ從ヒ地球ト月トノ二ツニテ試驗スヘシ汝カ輩特ニ近キヲ以テ月世界ノ大小物質及ヒ運

動速カト地球ノ大小物質等ハ猶且明カニ知レリト云フニ非スヤ精細ナル合藥法ニ拠リ此ノ二箇ヲ製造シ天ノ距離ニ比例シテ之ヲ地面ニ平列スヘシ汝カ云フ如ク地ノ引カ及ヒ空氣ノ妨害物アリトストモ是等ノ障礙ハ只此兩球ノ運動ヲ永遠ニ保タサシムルノモノナレハ僅ニ數分時間ヲ期シテ其運動ヲ試ムヘシ○蓋シ試驗ノ方法ハ平面上或ル距離ニ準スヘシ即チ天ノ距離ニ準スヘシ於テ右ノ二球ヲ安置シ月球ニカヲヲ施シテ地球ノアル処ト直角ノ方位例ハ地球東ニアリ月球西ニアル時南ニ向テカヲ加フヘシニ進行セシムヘシ此時ニ於テ月球設シ直線ニ進行セシテ地球ノ周圍ヲ環繞スルノ象ヲ見ル時ハ則チ天ノ日月星辰ノ運動ヲ實ニ引カノ所為ナリト為ヘシ若シ之ニ及レテ月球ハ動力尽キテ靜止スルニ至ル迄只直線ノ進行ノミニテ毫モ環行ノ軌跡ヲ見サルトキハ

天體ノ運動ハ決シテ引カノ為ス所ニ非ルヲ知ルヘシ○茲ニ讀者ハ如何ナル  
感覺ヲ生セシカヲハ此試驗ニ於テ未タ手ヲ煩ハサスシテ明ニ月球ノ地  
球ヲ環行セサルヲ知ル是ニ於テ予ハ在天ノ諸曜晝夜ノ運行ハ斷然引  
カノ所為ニ非スシテ固ヨリ他ノ故ヲ有ラズ決論証明スルニ足ルモノトス

○第九刻白爾<sup>ケッセル</sup>ノ三則 高名ナル刻白爾カ三則ハ衆人ノ能ク知ル所ヲ  
リト雖モ且ラ<sup>ヒ</sup>童蒙ノ為メ之ヲ掲出スルコト尤ノ如シ○星學圖  
說第九章ニ云ク問 刻白爾ノ法則ノ第一ナルハ何事ナルヤ

答 惑星ノ軌道皆橢圓ニシテ太陽ハ兩炎點ノ一ニ在ル事ナリ

問 第二ハ如何

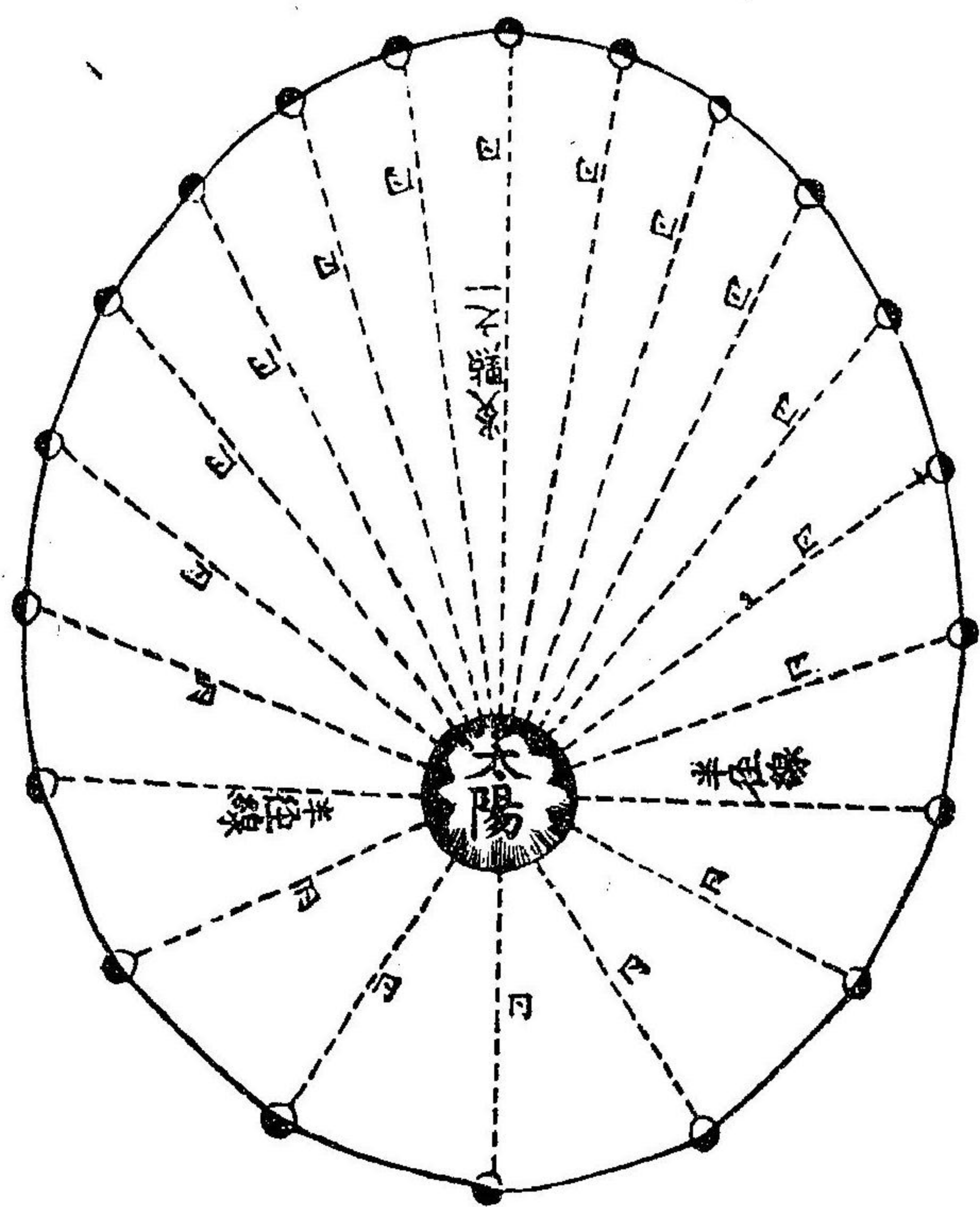
答 時限同シケレハ半徑線ノ經過セシ間ノ幅<sup>ヒコ</sup>サモ又同キ事ナリ

問 第三ハ如何

答 惑星太陽ヲ繞リ運行スル時限ノ平方ハ太陽距離中數ノ立方

ニ比例スヘシトナリ

第十圖



○以上ヲ刻白爾ノ三則  
ト云フ而シテ第一則ハ  
上圖ノ如ク凡ソ橢圓ニ  
ハ三要點アリ一ニ中心  
点即橢圓ノ正中心ナ  
リ而シテ他ハ二箇ノ炎  
点ナリ即正中心ノ左右



ニアリ前圖ニ於テ見ルヘシ之ヲ火点ト称スルハ光學ニ於テ金屬製ノ橢圓器ヲ  
 取リ一ノ火点ニ燭火ヲ置キテ他ノ火点ニホシチ火煤ヲ致ストキハ即直火  
 焼スルヲ以テ名ケタリ今地球及ヒ其他ノ諸曜ハ總テ太陽ヲ中心ト  
 シテ其周圍ヲ正圓ニ旋廻スルニアラス圖ノ如ク橢圓形ニ廻轉シ太陽ハ  
 其橢圓ノ交点ニアリトスモノナリ○第二則ノ意ハ前圖ニ於テ見ル如ク太陽ヨ  
 リ星ノ在ル處ヘ引キタル直線ヲ半径線ト名ク太陽ノ上下左右ニ於テ半径  
 線或ハ長ク或ハ短シト雖モ半径線ト半径線トノ間タニ授マリタル橢圓ノ面  
 積ハ皆同量ナル者ナリ例ハ長短廣狭ノ差アリト雖モ其平面積ハ皆相同シ  
早ク云ヒハノ面積百歩ニハ次々モ皆百歩ツナリ而シテ圖ニ於  
 テ星ハ今ハ地球ヲ云太陽直下ノ處即一月一日ニ在ル處ノ点ヨリ右次ノ点ニ至  
 リ又其次々ト運行スル日數同ク共ニ二十八日是レ大數ナリツナレハ其間タノ橢圓

而三角平積ハ皆相同シトナリ○第三則ハ地球及ヒ他ノ諸遊星カ太陽ヲ繞  
 リテ運行スルハ不規則ナル者ニ非スシテ悉ク同一轍ノ比例ナルヲ云フ

此三則ニ付テ別ニ詳論アリテ該三則ヲ粉碎  
消滅スヘシ其ハ第四編ニ具説ス故ニ今畧之

○第十 刻白爾ガ蛙見 刻白爾カ三則ハ甚タ巧妙ナリト雖モ三箇  
 ノ井蛙見ニ過キサルモノナリ曰ク地ヲ球圓ト為ス者是レ一ノ井蛙見ナ

地ノ球圓ニ非ルトハ上ニ奔スル  
カ如ク且下ニ陳述スヲ見テ知シ曰ク地ヲ圓トシ太陽及ヒ火木土等ノ遊星ヨリ

其體小ナリト為ス者是レ二ノ井蛙見ナリ曰ク前ニ論ゼシ如ク首唱  
 者ユヘルガ地圓地動ノ説ハ悉ク仮設ニシテ確信説ニアラス然ルヲ刻  
 白爾之ヲ實説トシ三則ヲ立テ之ヲ翼賛スル者是レ三ノ井蛙見ナリ  
 ○人々ハ常ニ蛙見ヲ卑シトシ大眼見ヲ尊シトスルコトヲ知ル奚ソ獨リ

天文ノ一科ニ於テ此大活眼ノ識見ナキヤ

○第十節 決論地動 問テ云ク總論以下ノ所論ヲ見ルニスヘテ地球説ヲ非トシテ之ヲ辯駁セラレタリ然ルニ前節ニ至テ地動ヲ巧妙ナルモノト為スハ洋説ヲ贊成スルニ似タリ如何 答テ曰ク地圓地動説ガ真ノ天ヲ知ラスシテ井蛙ノ所論ナルコトハ固ヨリ前ニ示セル如シト雖モ今日曆術ヲ弄スルニ於テハ甚々捷便ニシテ且人目ノ視象ニ脗合スルコト亦精密ナリ故ニ之ヲ巧妙ト云ハサルヲ得サルナリ

○問テ云ク地球家ニ於テハ曆數ハ曆理ヨリ生シ曆理ハ即テ天体實況ヨリ生スルモノナレハ曆術天体是ニチトス称ルニ今曆術トテ實体ト異ナリト為スカ如キハ何ゾヤ○答テ曰ク曆術ト天体トハ固ヨリ

異ナリ何トナレハ曆ハ唯人目ノ視象ヲ示セシモノニシテ天ノ實体ハ人ノ見不見ニ關セスシテ實体ハ自ラ實体ナレハナリ

○人々ハ常ニ遠山ハ低小ニシテ近山ハ高大ナルヲ視ルヘシ然レトモ器械ヲ以テ精細ニ之ヲ測驗スルトキハ或ハ遠山ハ却テ高大ニシテ近山ハ低小ナルヲ知ラシテ前キニ素視シタル両山ノ高低大小ハ是視象量ニシテ后ニ測量セシ者ハ其實物量ナリ是ニ於テ両山ノ真量ハ人目ニ如何ナル者ト視ルニモ關セスシテ其各自ノ真量ニ有スルヲ知ラハ亦其視量ト實量ノ斷然異ナルコトヲ知ルヘシ此等高低ヲ驗スヘキ便ナキ數千年前即未開ノ國ニ在リト仮定セハ必スヤ

此等 凡石翁視實等象詳解  
等ニ五種ノ視實ヲ辨シテ見

蓋シ人々ヲシテ器械ヲ測量術ナク且實地ニ就テ其

謂ハ前山嶺ハ實ニ高大ニシテ後山嶺ハ實ニ低小ナリト○今日ノ世界ニ於  
 テハ器械アリ測量術アリ航海術アリ船艦アリト雖然右ノ未開ナル世  
 界トハ只伯叔ヲ為シ其說五十歩百歩ノ間ニアルミナリ何ントナレハ只地  
 面海面ニ於テ遠近來往スルヲ得ルミ未タ天外ニ逍遙シ地中ニ潛入ス  
 ルノ能ク素眼ニテ一滴水中ニアル无量ノ小蟲ヲ見得ル等ノ能ナケバ  
 リ故ニ天文ノ科ニ於テ特ニ視象ト實象ト相異ナル者ト為ス○而シ  
 テ曆術トハ日月星辰ノ運行即日月ノ蝕月ノ盈缺等ヲ豫算シテ人  
 目ニ適合セシムルニ過キサル者ニ非スヤ故ニ太陽曆ト年月ニ因テ曆日ヲ製  
 造スルモ大陰曆ニ據ルモ人目ノ所見ニ於テハ更ニ其相違アルトナシ之因  
 テ尤ノ三則ヲ確定セリ

第一 曆術ハ簡易ヲ要スヘキナリ

第二 曆術ヲ談スルニ際シテハ天地ヲ球圓トシ半圓トシ或ハ三角四  
 角トシ或ハ動トシ靜ト為スモ妨ケナキモノナリ

第三 曆理ヲ仮設ト為ス故ニ曆理ヲ以テ天地ノ真象ナリト誤認スヘカス  
 按スルニ彼ノ歌伯<sup>コバ</sup>泥<sup>ニ</sup>ガ地圓地動說ヲ創造セルヤ即右ノ三則ノ意ヲ出テス  
 ルルニ後世茲<sup>コ</sup>著<sup>カ</sup>目<sup>シ</sup>セ<sup>シ</sup>テ<sup>テ</sup>方<sup>大</sup>歎<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>者<sup>ハ</sup>甚<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>謬<sup>レ</sup>リ實ニ團十  
 郎小照ヲ誤見セル者ト謂ツヘシ

○<sup>第二</sup>駁<sup>地</sup>動<sup>確</sup>証 問テ云ク前論ニ於テ既ニ地動說ノ仮設ナルコト  
 ヲ知レリ雖然前ニ掲ケシ彼ノフーコー<sup>フーコー</sup>氏ガ實驗セシニ條<sup>ハ</sup>地球ヲ以テ地  
 球<sup>ハ</sup>動<sup>ク</sup>ヲ實驗ス<sup>ル</sup>ノ確証ニ據ルトキハ則地實ニ廻轉スルカ如シ如何

答テロク是只理ノ實事ヲ云フニアラス例ハ地碎クルトキハ人死スヘシト云フニ似タリ故ニ理ハ則然リ事ハ則無シ何ントナレハ我日本ニ於テも地球儀及ヒジロスコードノ器械傳リテ教育上毎々指示スル所タリト雖モ未タ此器ヲ用テ精則ヲ遂ケ實ニ何分時間ニ何分ノ交角ヲ檢出セシトモナク又何分ノ差ヲ發見セシト云コトナシ且西洋ニ於テ彼ノフーコル氏モ巴黎府ノ寺院等ニテ試驗セリト云クニシテ未タ其差ノ若干量ヲ云ハサルモハ其實事ニ非ル確証ナリ○地動說捏造ノ組織ハ予カ臆譚ニアラス首唱者ノ思想ハ明カニ上卷ニ陳述スルカ如シ然ニフーコル氏此兩條ノ試驗法ヲ以テ地動說ヲ修飾ス附會ノ甚キモノト謂ツヘシ

○第十節 及間地動家 試ニ地動家ニ向テ尤ク條ヲ及問ス地動家夫レ明カニ確答セヨ

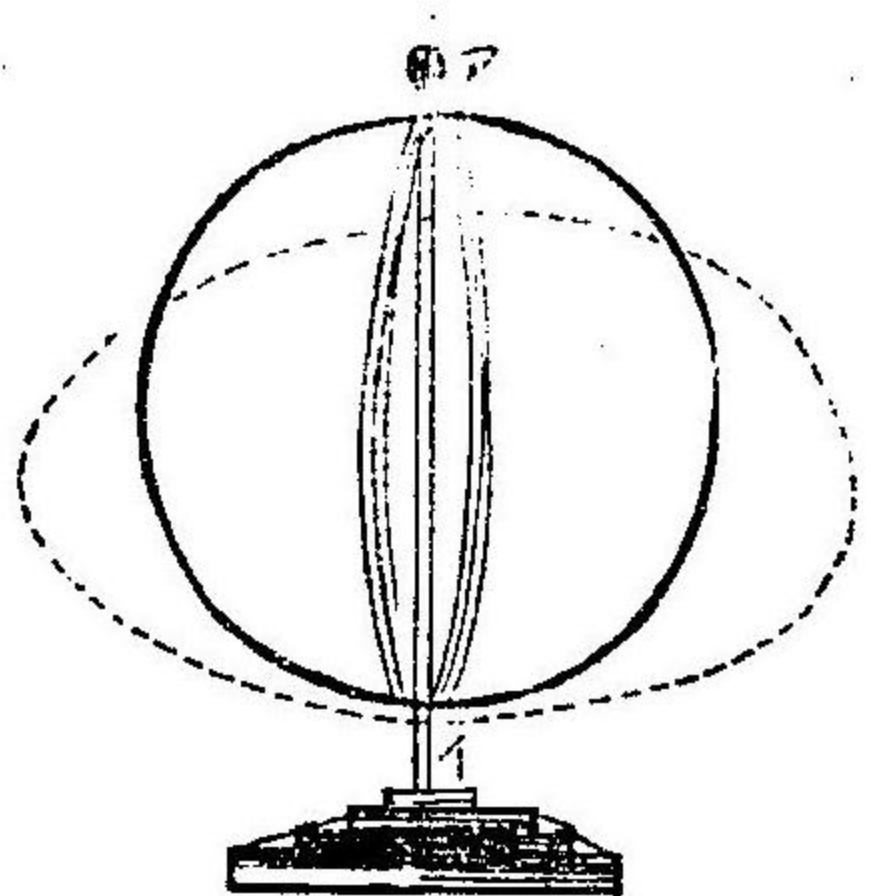
第一 地球家遠心カノ說ニ云ク遠心カガ地球表面ノ隨處ニ於テ蓋異ル理ヲ知ント欲セハ須ク第十二圖ノ器ヲ用スヘシ此器ヲ製ハ金屬ニテ造リタル薄ク撓カナル二個ノ圓帶ヲ直角ニ相交ヘ其會点ニ軸ヲ貫キ(1)ノ点ヲ勒止シテ上下スルヲ得ザラシメ(2)点ハ放テ上下スルヲ自在ナラシムルヲ要ス而シテ之ヲ急旋スルトキハ圓帶ニ遠心カヲ起シ圖ノ如キ橢圓形ヲ為ス其橢圓ノ形狀ハ速カノ多少ニ隨テ増減ス蓋シ其旋轉全ク息ムハ又故形ニ復スル者ナリ○遠心カハ前文ノ如キ作用ヲ為スヲ以テ地球現今

ノ楕圓形ヲ造為セル者ト略定セシ蓋シ地球ノ創造セルヤ其體質  
ハ系軟溶動セシ者ニシテ堅牢固定ナラサルヘシ然ルニ其堅牢ト成ル  
ノ際回轉ノ疾速ニ遇フテ遠心力旺盛セシヲ以テ赤道ノ面ハ膨脹隆  
起シ兩極ノ面ハ扁平陷没シテ遂ニ扁圓地形ヲ造為シ兩極ノ  
直徑ハ赤道ノ直徑ヨリ短キテ十里半餘者トハ成レリト

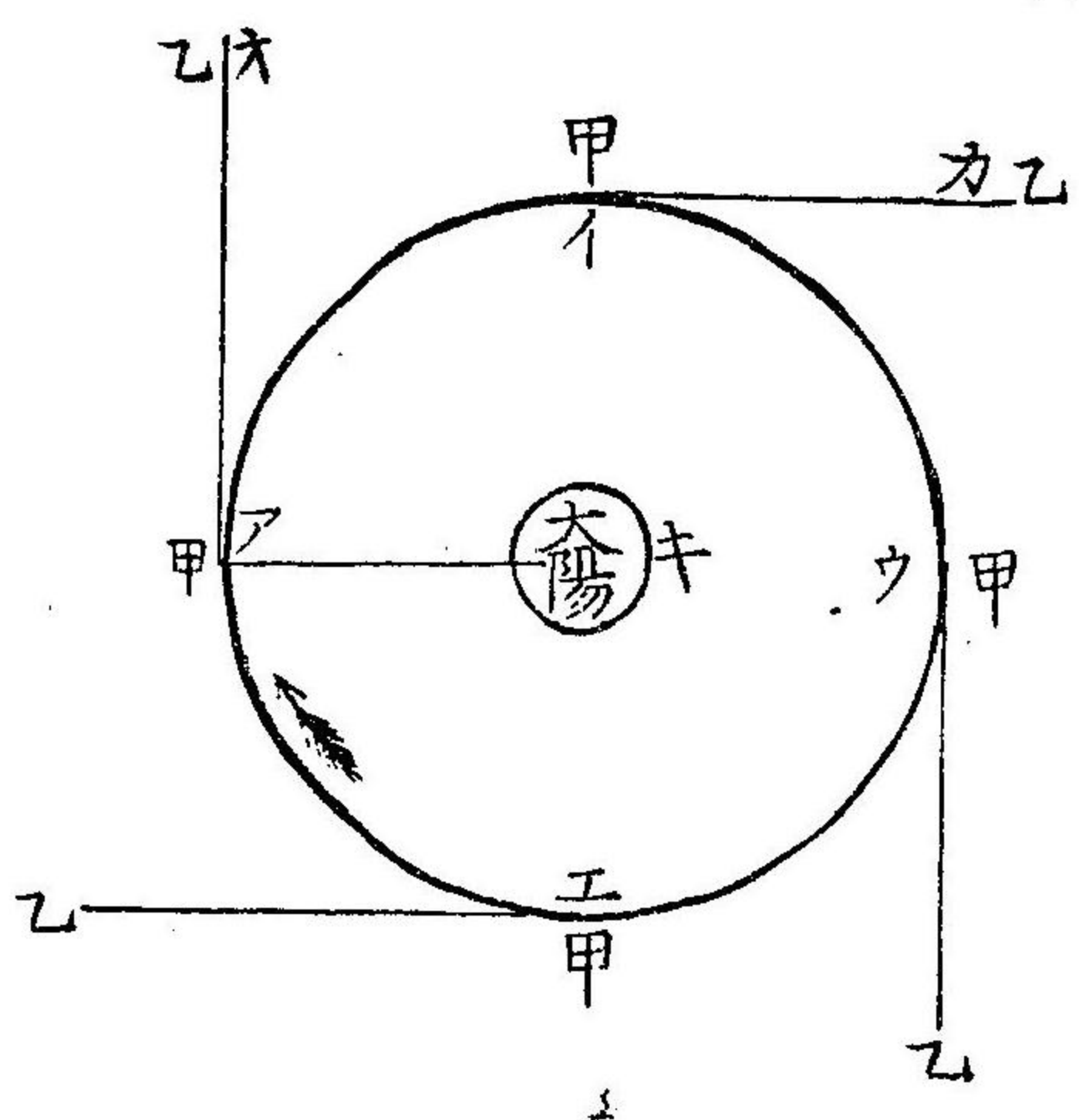
以上物理全志ニ卷六丁ニ記ルセシ文ナリ此極ノ物理學ノ會類ニ記載スル所及ニ地球家常ニ云フトコロ  
共ニ如此

○問 理學ニ於テ諸曜ノ回轉スルハ悉ク引カノ所為トス今右説ノ如ク地  
球幼軟ナル時早ク云ハ、沐浴ノ如キ者如何シテ自轉カヲ生セシヤ地軸ノ引カトモ  
云フヘカラス○又地球家ハ常ニ理學ノくニテ天象ヲ談スレトモ其理ヲ通ズベ  
カラサルニ至テハ毎々造物主ノ靈妙ニ歸セサルハナン地球最初ノ自轉カモ

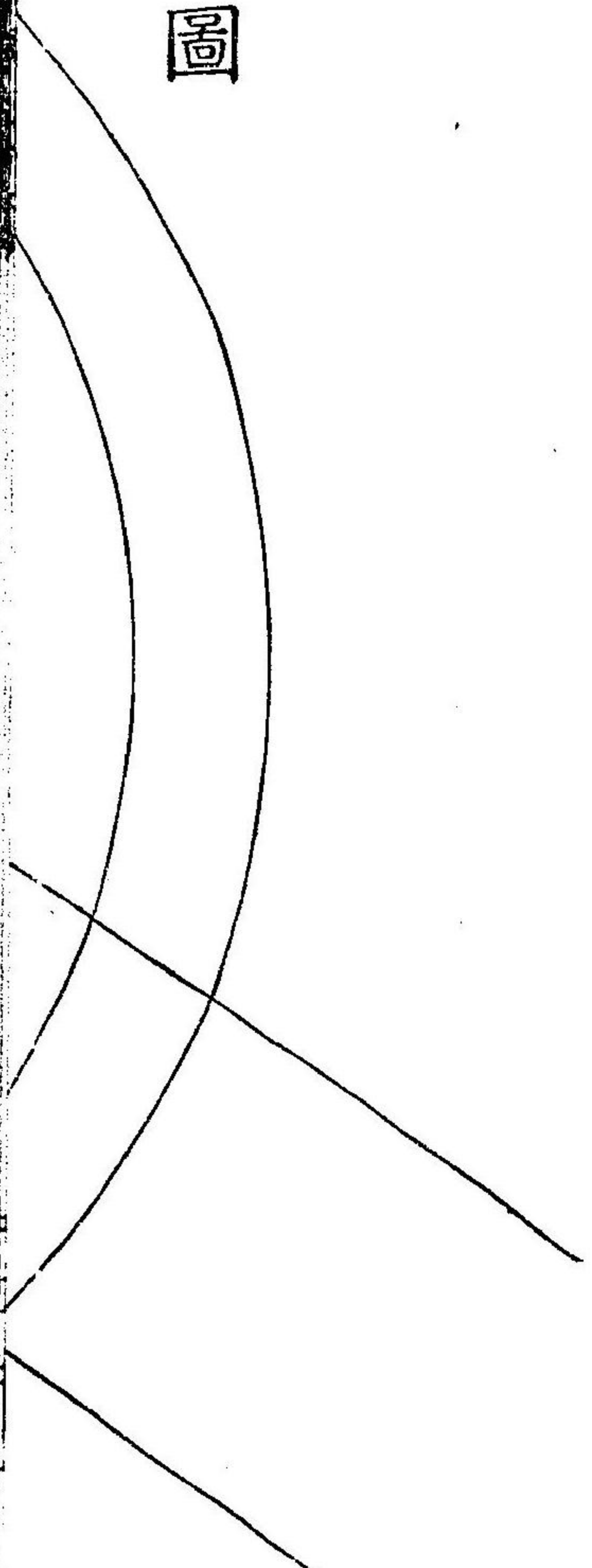
第十一圖



第十二圖

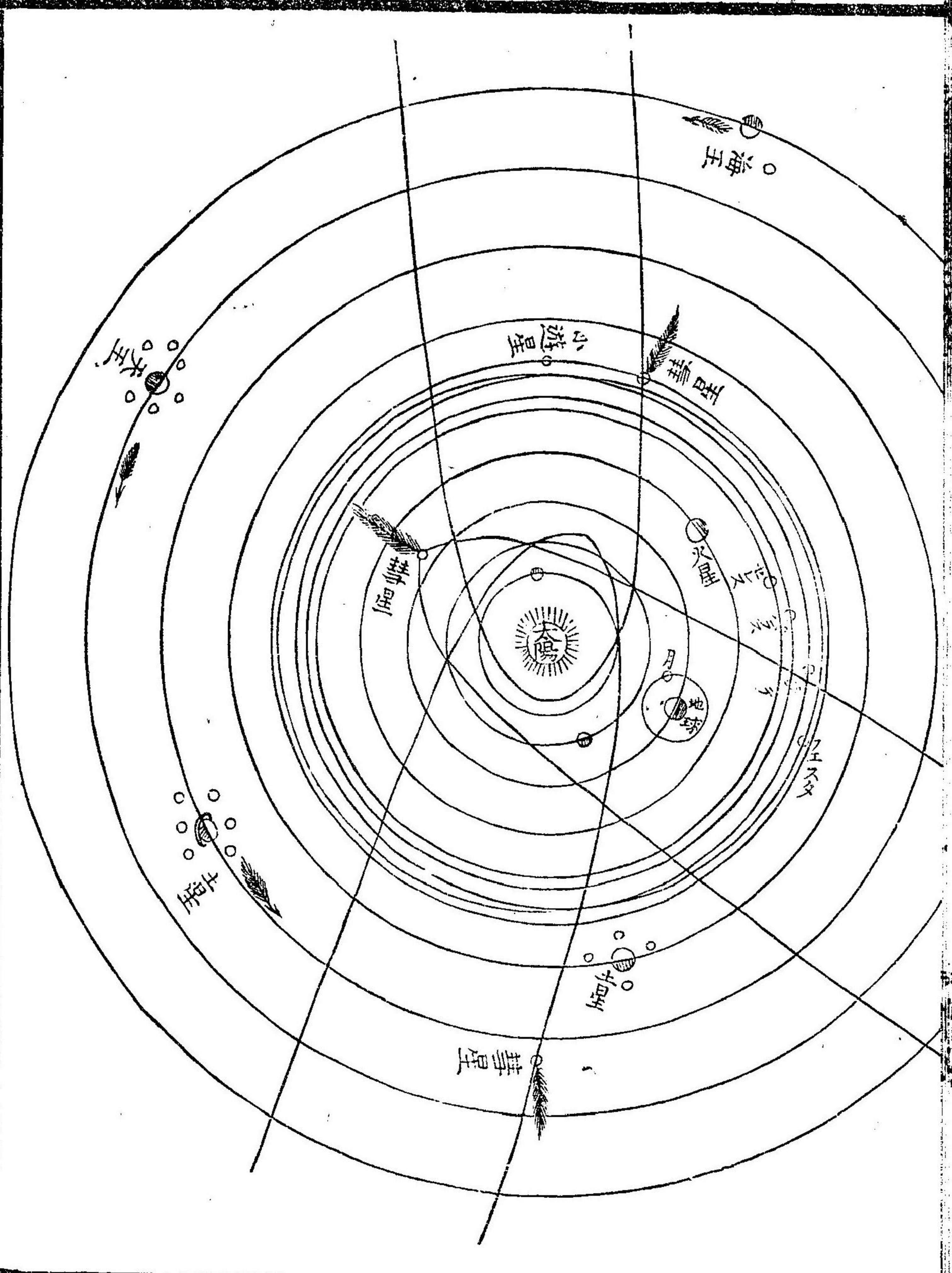


第十三圖



亦造物主ノ靈妙カニ帰セシ子若シ然ラハ引カノ遠心カノト云フ理學說ハ  
貫徹セサルニアラスヤ如何

第二 英國理學ノ大家ト称スル奈端カ運動ノ法則第一ニ云ク  
静止ノ體ハ常ニ静止ニ安シ運動ノ體ハ様々速カラテ直線進行  
ス蓋シ物體ニ外力カノ感ナキキヲ以テ謂フナリト該法ニ順テ謂フハ物ニ  
擲射カクモリテ外力カノ感ナキキハ其物直線ニ進行ス縱令外力カノ為  
ニ妨ゲラレテ曲線ニ進行スルコトアリトモ其性ハ尚直線進行セント欲ス  
ルト第一圖ノ如シ蓋シ繩ニ球子ヲ繫キ其一端ヲ(甲)ノ處ニ縛シ球子  
シテ輪旋セシムルニ其球(乙)ト旋轉ヲ為ス若シ(丙)ニ在ルニ方ツテ其  
繩ヲ切斷スルハ球子直ニ(丁)ニ向テ飛去シ(戊)ニアルハナレハ(己)ニ回飛



去スの(四)モ亦之ニ準スヘシ以上物理全志ノ文○又是ヲ六合最取談二ノ二廿ニ云ク

大陽中有吸力故能令諸行星繞之同地唯一推力使之動則必  
行甲乙直線設無此推力而僅有日之吸力則地必向日而行而足  
吸力与推力恒并加故成弧線行此二力恒不停故弧線之行亦恒不  
變而地之軌道成焉是亦理學上ヨリ云トコロニシテ地球直線ニ進行スヘキヲ大陽ノ引カニ因テ飛去ルコト能ハスシテ大陽ノ周圍ヲ繞

リテ運行スルヲ云フ

○問 地球ハ夫レ何處ヨリ甲所ニ來リ第耐又乙方ヘ向テ何處ヘ行ク  
ノナリヤ又此ノ如キ至テ迅疾ナル洛氏天文學上二百二十丁ニ中數一秒間實ニ十九里ヲ運行スルモノニシテ至速ノ氣球車ヲモ迅速ナルヲ十餘倍ニ過クト云ヘリ速カラテ何用事有テ誰カ為メニ急走スルモノナルヤ設シ  
其君ノ為メニ某處ニ急ヲ生ロントシテ疾走セル者ナラハ中途ニテ

大陽ニ束縛セラレテ甚々迷惑ナルヘシ又某君モ定メテ待チ倦玉

ハン又大陽モ甚々殘忍ナル所業ニアラスヤ如何此事獨ク地球ノミナラス他諸遊星モ皆之ニ同シ

第三 地球說ニ云ク大陽界トハ大陽ヲ中心トシ其周圍ヲ繞

グル所ノ諸遊星ノ旋回スル天空内ヲ云フ而シテ大陽ハ此等ノ諸

遊星ヲ引奪シテ天ノ公重心無星ヲ一彗ヲヲ旋回スル者ナリト前第十

三圖ハ即諸遊星が大陽ヲ繞クル所ヲ示ス者ナリ

○問 地動家ハ每ニ衆動一貫ノ理ヲ誇張ス上卷ニ記載スル所ヲ見ト雖モ仍且

衆動錯綜ヲ免カルコト能ハサルニ非スヤ何ントナレハ大陰ハ地球ノ周圍

ヲ旋回シ水金二星々々單ニ大陽ヲ繞ルト雖モ其他ノ遊星ハ皆單

ニ大陽ヲ繞クラス地球ト共ニ許多ノ諸月即小圖星ナリヲ推乃帶シツ大陽ヲ

西回スレハナリ是ヲモ衆動一貫ト謂ハ地ヲ不動トシ日月星辰ヲ悉ク地ノ周圍ヲ回轉スルト為スモ亦衆動一貫ニアラスヤ如何

第四 前説即第十三圖ニ就テ反問ス

○問 諸曜ノ太陽ヲ西回スルハ太陽ノ引カニ由ルト云フ仮リニ許スモ太陽カ此等ノ諸曜ト共ニ天ノ公重心ヲ繞クルト云ヘルモ抑ク何ノ理ニヤ太陽諸曜ハ實體アリ故ニ引カモ吸カモ且ラク有リトスヘシ然レトモ无星无体ノ天空一点何ノカアリテカ能ク鉅大ナル各曜ヲ吾カ周圍ニ回旋セシムルヤ若地球家答テ无星ノ公重心ハ引カナシ太陽界各曜ノ總回轉スル所ヨリ其重カ心ハ求メシテ生シタル者ト云ハ其太陽界ノ總回轉ハ何ノ理即何ノ引カヨリ生シタルヤ如何

第五 近來ノ西説ニ我カ太陽ハ吾レニ近キ重心ヲ回旋スルニアラス

諸曜ト共ニ他ノ世界ノ太陽ヲ西回スル者ナリト或ハ諸曜ト共ニ一直線ニ進行スルモノト云フ杜撰モ亦甚ク果シテ此説ヲシテ真ナラシムハ

○問 太陽ハ復何處ヘ何用アリテ行く者トスルヤ

第六 右ノ如ク論セハ地動家或ハ謂ハシ此ニ至テハ造物主ノ冥

妙敢テ思議スヘキニアラスト

○問 若シ然ラハ汝カ前キニ不便トセシ天動錯綜ナルモ造物主ノ冥妙ニアラスヤ又一小地球安靜シテ至大ノ天球及ヒ諸曜ノ運動スルモ冥妙ニアラスヤ事ヲ造物主ノ冥妙ニ歸セハ天地間一物トシテ冥妙ナラサルハナシ夫レ冥妙説ト理論西人理論トハ水火ノ如ク異ナリ然レニ汝常ニ



汝等カ云フ所ノ物理ニ適スル者ヲ以テ實理トシ適セサル者ヲ比白虚説ト為スハ何ソヤ前後相違即屍口<sup>シテ</sup>テ物言フ者ニアラスヤ○汝カ思想ノ及ブダケハ造物主ニ讓ラスシテ常ニ其妙説ヲ排斥シ汝カ思想ノ窮マルニ至テハ及テ造物主ノ其妙ニ附ス其甚ク拙キ私論ニアラスヤ如何

第七 天體ヲ以テ造物主ノ工事ニ附スル時ハ特リ地球ノナラス水金火木土星等ノ諸遊星モ悉ク自轉シツ、大陽ノ周圍ヲ公轉ス<sup>三</sup>圖而シテ此公轉ナル者ハ彼ノ運動ノ法則ニ準スルハ元比自直線進行セシ者ヲ大陽ノ引カニ因テ曲撰セラレタルモノト為ス然ラハ造物主ノ手段モ亦奇ナル哉彼獨樂子<sup>コト</sup>司ハ掌上ニテ獨樂子ヲ予ト回轉セシメテハ之ヲ板上ヨリ他処ニ傳ヘ予ト捻リテハ擲上スル者ナリ今亦然リ初二天王

星海王星ノ如キ獨樂子ヲ製造シ予ト聲カケ捻リ回ハシ自轉セシヤツト聲カケテハ空中ニ拋擲シ土木火金水ノ五星モ皆此ノ如シ捻リテハ投出シ捻リテハ投出シ啻ニ捻テ投出クナラス太獨樂子ヲ捻旋シ其周圍ニ數個小獨樂子ヲ旋回セシメテ夫ヲ太獨樂子ト共ニヤツトコサト投出ス地球ト云ヘル大獨樂子ノ周圍ニハ太陰ト云フ小獨樂子ヲ旋回セシメテヤツトマカセト投ケ出ス等前第十三圖ニ於テ明カニ見ル所ナリ

○問 是レ何ノ戲劇ナルヤ

第八 地球家常ニ云フ所ノ造物主ナル者ハ即チ耶蘇者流ノ所奉ノ嫉妬ノ神トイヘル者ナリ然ニ彼旧約書創世記ヲ見ルニ造物主初二天地ヲ造リ光暗ヲ分テ昼夜ヲ辯シテ之ヲ第一日ト為シ第四日ニ至テ日

月星辰ヲ造ルト云フ蓋シ日月未夕製造セサルニ地先ツ回轉シ拋擲セラレタ  
 リト為サハ地ノ軌道ヲ行ク速カハ一秒時間二十九里ヲ運行ス出キ故三時  
 間ニ六六万八千四百里ヲ行キ一昼夜二十四時ニ二百六十四万一千六百里ヲ  
 行キ四日間ニ六六万五千四百里ヲ行クヘシ○然ルニ耶蘇者流此  
 創世記ノ一日ハ二十四時ヲ云ニアラス當時ノ一日ハ今ノ幾万年幾千年ニ  
 モ相當ル者トス然レハ地球ハ其歲月ノ間直線進行シテ如何ナル世界ニ  
 アルヘキヤ知ヘカラサル者ナリ

○問 右ノ如ク絶テ久シキ歲月ノ後ニ製造セシ太陽ノ周圍ニ地球ハ  
 如何シテ回轉セシヤ

第九 前條創世記ニ據リ及問ス

○問 日月ノ製造ハ其時日相迫クシテ日月星辰ト地トノ製造時  
 ハ相距ルコト甚夕遠シ故ニ理日月星ノ相距ハ甚夕近ク月ト地トノ距  
 離ハ甚夕遠カルヘシ然ルニ月地ノ距離ハ日地ノ距離ヨリ却テ近キ一凡  
 四百倍即チ中數ニテ二十四万里月地距離ニシテ日地ノ距離ハ九千一百四十  
 三万里何レモ洛氏天文學論出前トス是レ何ノ理ナルヤ

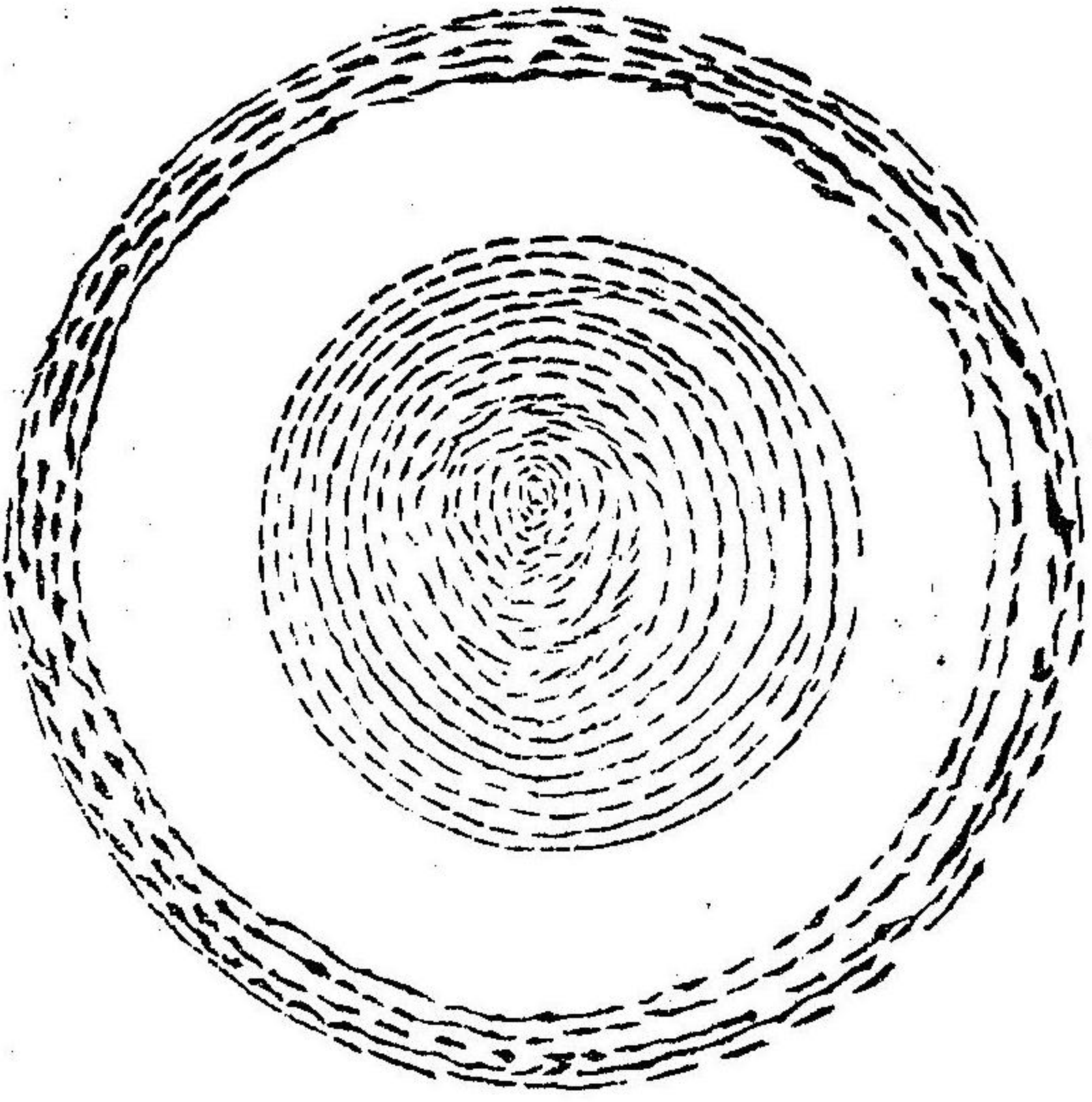
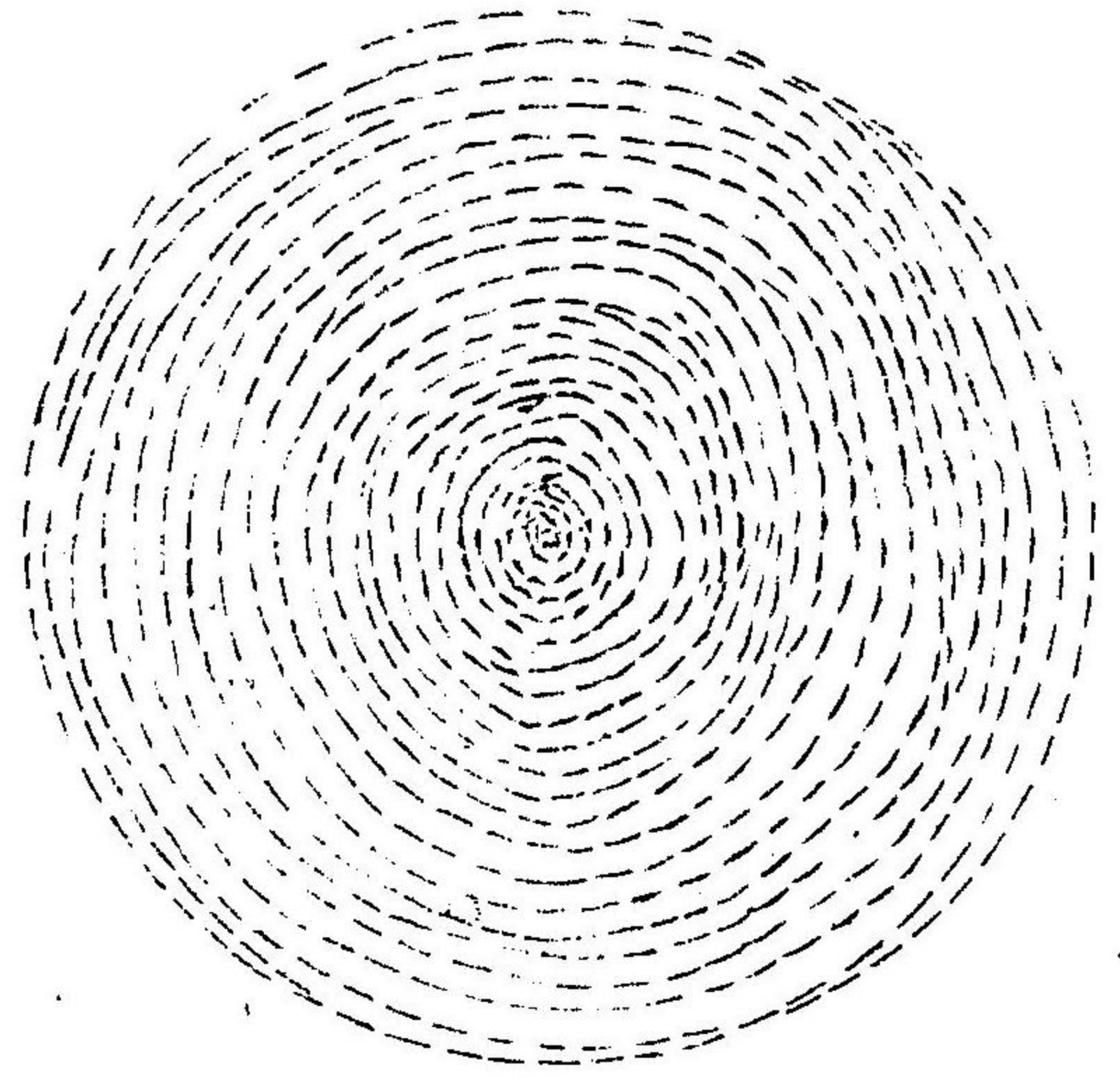
第十 近來地球家ノ開闢說ニ云ク曆象新書混沌未分ノ時ハ唯

大氣ノミナリ大氣未變ノ時ハ大虚ノミナリ大虚ノ體純粹ニシテ碧瑤碧瑤  
 ノ如シ而シテ神氣往來ノ街タリ而シテ此太氣神氣ノ往來ニヨリ  
 自然ニ各分子間ニ凝聚カヲ生シ又運動カヲ生セシヨリ從テ求心カ  
 ト遠心カヲ生シテ第十四圖ノ如ク水渦狀ヲ為シテ回轉シ此際凝聚

カハ中心ニ集リ又遠心カハ大氣團ノ赤道上ニ集サリ自ラ厚薄ノ氣

第十四圖

第十五圖

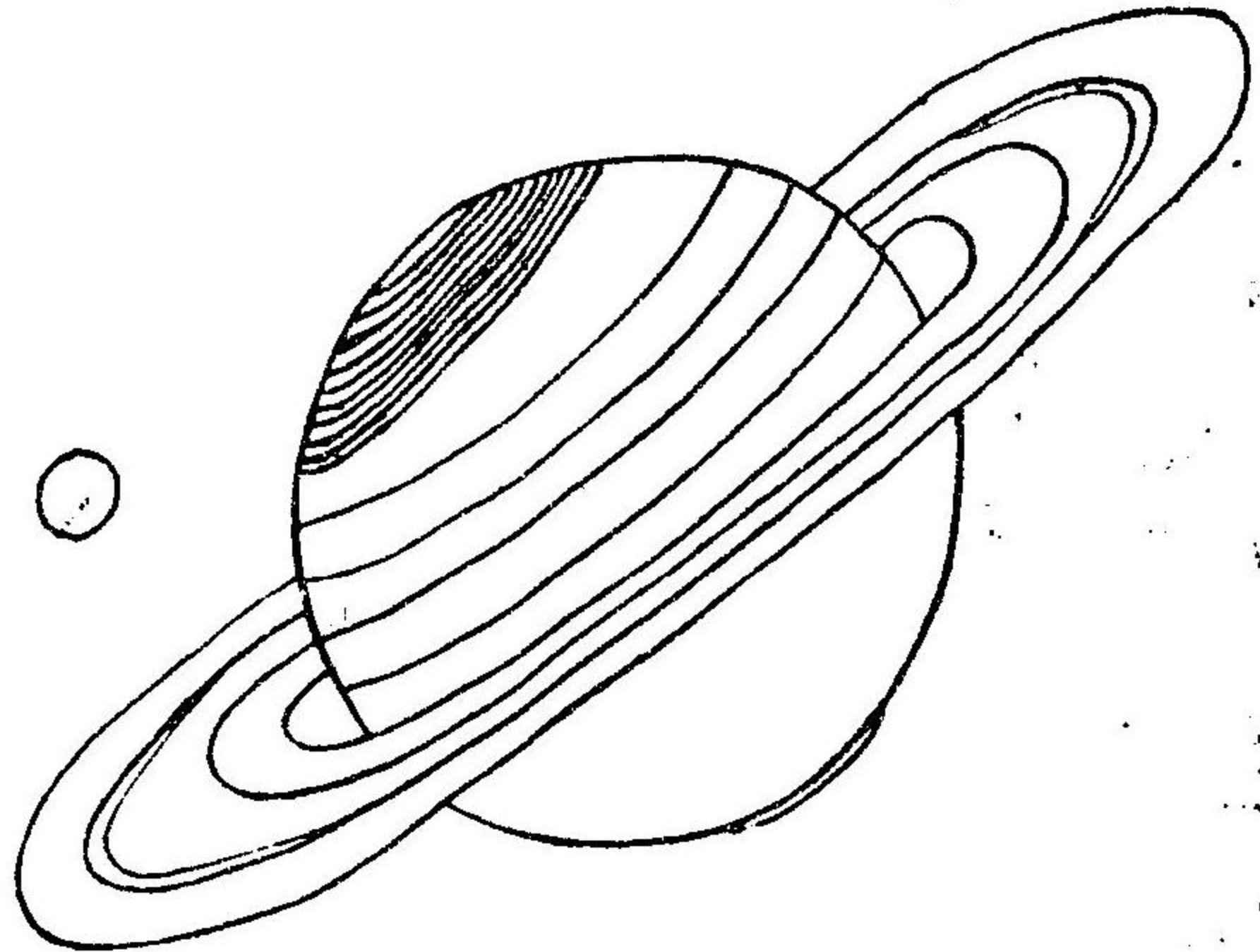
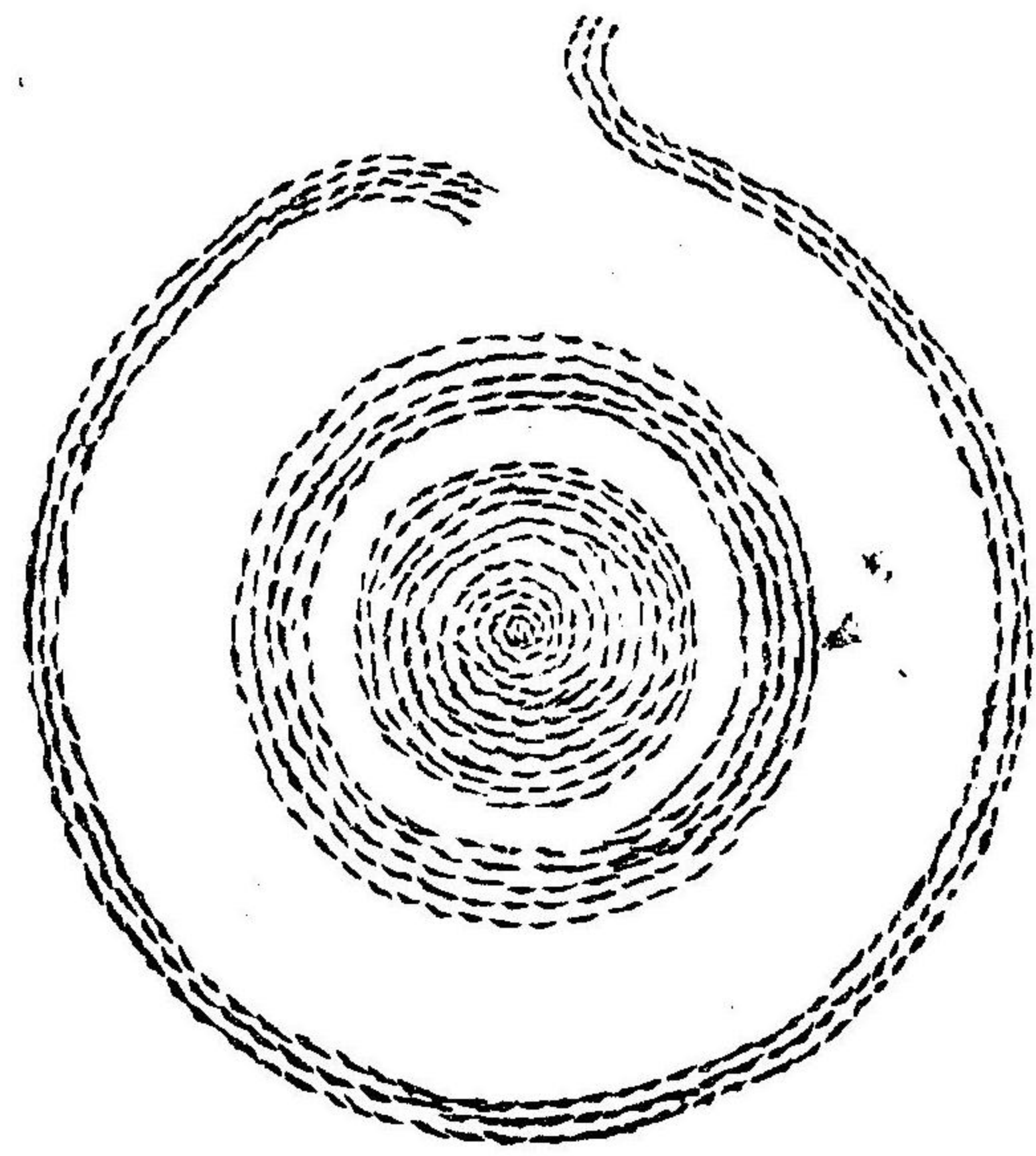


層ヲ生シ其至薄ノ部分ヨリ第十五圖ノ如ク分開シ此環狀氣ハ第十六圖ノ如ク切斷シ自己ノ凝聚カノ為メニ團結シテ四体トナ

リテ空中ニ回轉ス此ノ如ク元大氣團ノ赤道ヨリ環狀氣ヲ分開シ

第十六圖

第十七 土星之圖



テ八圓体ヲ製造シ從テ回轉シ從テ分開シ竟ニ斯ノ大小許多ノ

遊星屬ヲ造作ス○而シテ右ノ環狀物ヨリ凝聚セシ團結ノ氣  
 仍回轉シテ又各其赤道上ノ遠心カノ強キ所ヨリ環狀ノ氣ヲ分開  
 シテ諸遊星ヲ生成セリ即吾方太陽屬ノ如キハ最初元大氣團凝  
 聚シ來テヨリ回轉ノ未始テ環狀ノ氣ヲ分開シテ製造セシ圓體ヲ  
 海王星ト名ク次ニ天王星等第十三圖ニ見ル所ノ諸遊星ナリ如此  
 諸遊星ヲ生成シテ後中心ノ精氣遂ニ凝結シテ太陽ト成ルナリ○又此  
 等ノ諸星モ自己ノ回轉ヨリ各々環狀ノ氣ヲ分開シ圓體ヲ製造セシ  
 者ノ各遊星ヲ繞ル所ノ圍星ナリ地球ニ在テ太陰即是ナリ而シテ第  
 十七圖ノ如ク土星ニ於テ二個ノ大環仍土星ヲ腰帶セル者ハ最初分開  
 セシ環狀ノ氣ノ山體ト成リ得ガリシ者ナリ○天地開闢ノ景況此ノ如シ

故ニ諸遊星カ太陽ノ周圍ヲ回轉スル方向第十三圖 前ヲ以テ示カ  
 如シ皆同ク且各星ノ圍星カ其主星ヲ旋回スル方向モ皆相同共ニト  
 云フ

○問 此ノ開闢說ヲシテ設シ真ナラシム第十三圖ニ於テ見ル如キ彗星  
 ノ回轉如何ガスルヤ決シテ此運動ノ定則ニ合セス且創世記造物主ノ說ニ  
 全ク悖戾セリ如何

○右ノ問題ノ如キハ彼ノ狂人東ニハ遂ニ者在セシトモ亦東スルノ風情ニテ  
 實ニ大氣ヲシテ雖モ地球家ノ杜撰ニ應シ去ヲ得ル所ナリ蓋シ西ノ物理ニ  
 長セリト雖モ特ニ天文學ニ於テ固ヨリ彼ノ僻見ヨリ出所ナラハ口我カ  
 見ル所吾方想像セシ所即荒唐不經早ク云ハ出タラノ説クナリ是即

地球説ノ地球説タル所以ナルヘシ

第六項 決論支那之天學

○第十節 蓋天説 蓋天ノ説ハ且ラ久目ノ素見ニ適セスト雖モ深ク之

ヲ討覈スルトキハ其見渾天及地球説トニ高出スルコト万々倍ナリ只

惜ムヘキハ古代ニテリ其説精密ナラス○何ヲ以テ其見渾天及地球説ヨ

リ高シト云フニ五義アリ一ニ地ノ回轉ヲ談セス是ハ右ニ論セシカ如ク地ハ實ニ回轉セサレハナリ二ニ地ノ

球圓ヲ説カス是ハ下ニ詳論スルカ如ク地ハ決シテ球体ナラサレハナリ三ニ日月星辰ノ水中出波ヲ云ハ

ズ四ニ北極下夜國等ヲ説ク此事地球家ハ實驗上始テ之ヲ主張シ

蓋天家ハ見スシテ之ヲ説テ而モ其實ヲ得ル五ニ渾天及地球家ハ只

視ル所ニ據テ日月水中ヲ出波不云云或ハ三光地外ヲ豎旋スルモノ

ト立ツト雖モ蓋天ノ素眼ノ所見ニ拘泥セシテ三光ノ横旋ヲ立ツレハナリ

○蓋天ノ蓋天モ亦人目ノ視象ヲ談スルニ天地ノ實體ヲ説明セシ者ニアラ

ス唯地球説ヨリ其見ノ歩高キニ是レ聖者モ亦人ナル所以ナリ蓋天ハ支那聖人ノ

説ナルコト上卷ニ記スルカ如シ

○第十節 渾天前説 渾天前説ハ天文説中最拙劣ナル者ニシテ是亦聖者

ノ見ト常人ノ見ト自ラ異ナル所以ナリ故チ今日ノ西人ト雖モ之ヲ古代ノ器械ナ

ク天文學ノ開ケサル世界ニ移置セリト仮想スル片ハ復皆該説即三光水中

ヨリ出波スル説ヲ唱ヘガレヲ得ガレハシ何ントナレハ天文學未開ノ國ニテヤ

支那西洋其見元ト同一ナレハナリ○該説ハ幽莽甚クシト雖モ今日巧エヲ

尽クセシ地球説モ其源之ヲ基底トシテ漸ク改正シ逐テ精ヲ加ヘタル者

ナレハ地球説ノ母ト称スルモ不可ナルヘシ

○第十節 渾天後説 渾天後説ハ即チ前説渾天ノ進歩ヲ得タル者ニシテ

天象ヲ談スルノ之ヲ前説ニ比スレハ精且甚ク可ナリト雖モ地ヲ球圓ト為セ

シヲ以テ最モ誤マレリトス○夫レ天霄ノ穹隆タル天象ノ堅旋スルヤ皆

人目ノ視象ニシテ天地ノ實象ニアラス抑々宇宙ノ彎曲ナル天象ノ堅旋

セルヤ是レ此ヲ眼界穹隆ノ理ト云フ眼界ノ事ハ第二編ニ至テ詳説ス

ヘシト雖モ今ハ渾天象ガ今日ノ地 珠家モ亦此理ヲ知ラスシテ北極及南星ノ高低ヲ

測量シテ地ヲ球圓トセル誤謬ヲ辯シテ以テ今古ノ疑惑ヲ散スヘシ

○第十節 極星高低ノ説 地圓説ニ謂ハク南行二百五十里スレハ是ハ支那里 日本ニテハ二

里ニ分十八南星多ク見ユル一度北極低ルル一度ナリ之ニ及シテ北行二百五十里

スレハ北極高クナル一度ニシテ南星低ルル一度ナリ尚二百五十里ツ、南行シ

或ハ北行シテ遙遠ナル南地北地ニ至リ星象ヲ測ルニ何レモ二百五十里ニシ

テ星体ノ一度ツ、高低スルヲ見ル地設シ平坦ナラハ絶テ此象ヲ見ルヘカラ

ス故ニ地ノ球圓ナルヲ實トニ信スヘシト此事上卷ニ詳掲セシヲ以テ重複ナリト雖モ 緊要ナル部分ヲ以テ茲ニ再出ス

○此事地體平坦ナル証ニシテ決シテ球圓ナル証ニアラス人々ハ第十八圖ノ

如ク天霄ノ五カ行處ニ從ヒ穹隆トシテ大凡半圓形ヲ為スカ如キヲ視シ

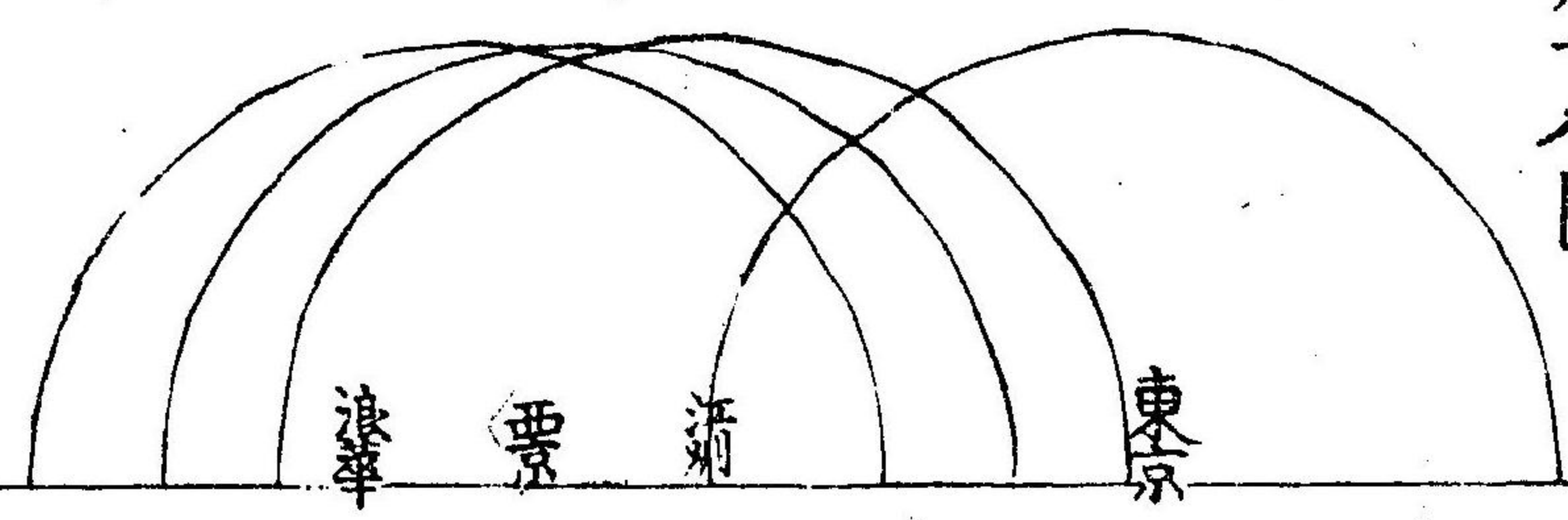
例ヘハ西京ニ在テ天ヲ望ノハ西京ノ天ハ最高ク浪華及江州ノ天ハ較低ク

東京並ニ長崎等ノ天ハ地ニ委ヌルカ如ク卑キヲ視ル然レトモ浪華ニ

至レハ又浪華ノ天最高トナリ西京其他ノ天ハ悉ク低下シ又江州長

崎東京ニ至ルモ亦復此ノ如シ是レ此ヲ眼界ト云フ是レ衆人ノ常ニ

第十八圖



視テ共ニ疑ハセトヨナリ蓋シ眼界ニニアリ曰ク地面ノ  
 眼界ト天空ノ眼界トナリ地面ノ眼界ハ之ヲ措キ天空  
 ノ眼界ニ付テ天体ノ高低ヲ示サント欲ス○夫レ吾人ヲ  
 シテ上圖ノ如キ天空空隆ノ象ヲ視セシムル者ハ何  
 ソヤ悉ク是レ風輪ノ所為ニシテ 凡輪ハ厚薄ノ空氣重疊  
 旋環スルヲ以テ名ク經ニテ六  
種ノ風輪ト説ケリ西洋ニハ空氣重疊ニテ  
 二種ヲ談スルモ未ダ其餘ハ知ラズナリ 吾人ハ生來此風輪即  
 空氣輪ヲ各自ノ頂上ニ被戴シテ嘗テ其輪外ニ  
 出テ輪内ヲ顧眄シ能ハザルモノナリ譬言ハ生來眼  
 鏡ヲ目ニ帶テ嘗テ鏡外ノ万物ヲ直視セザルカ如シ  
アリカリシ  
 故此風輪ヲ生來ノ眼鏡ト云フモ不可ナカルヘシ

如斯生來ノ眼鏡アリテ天体ヲ素眼視セザラシム

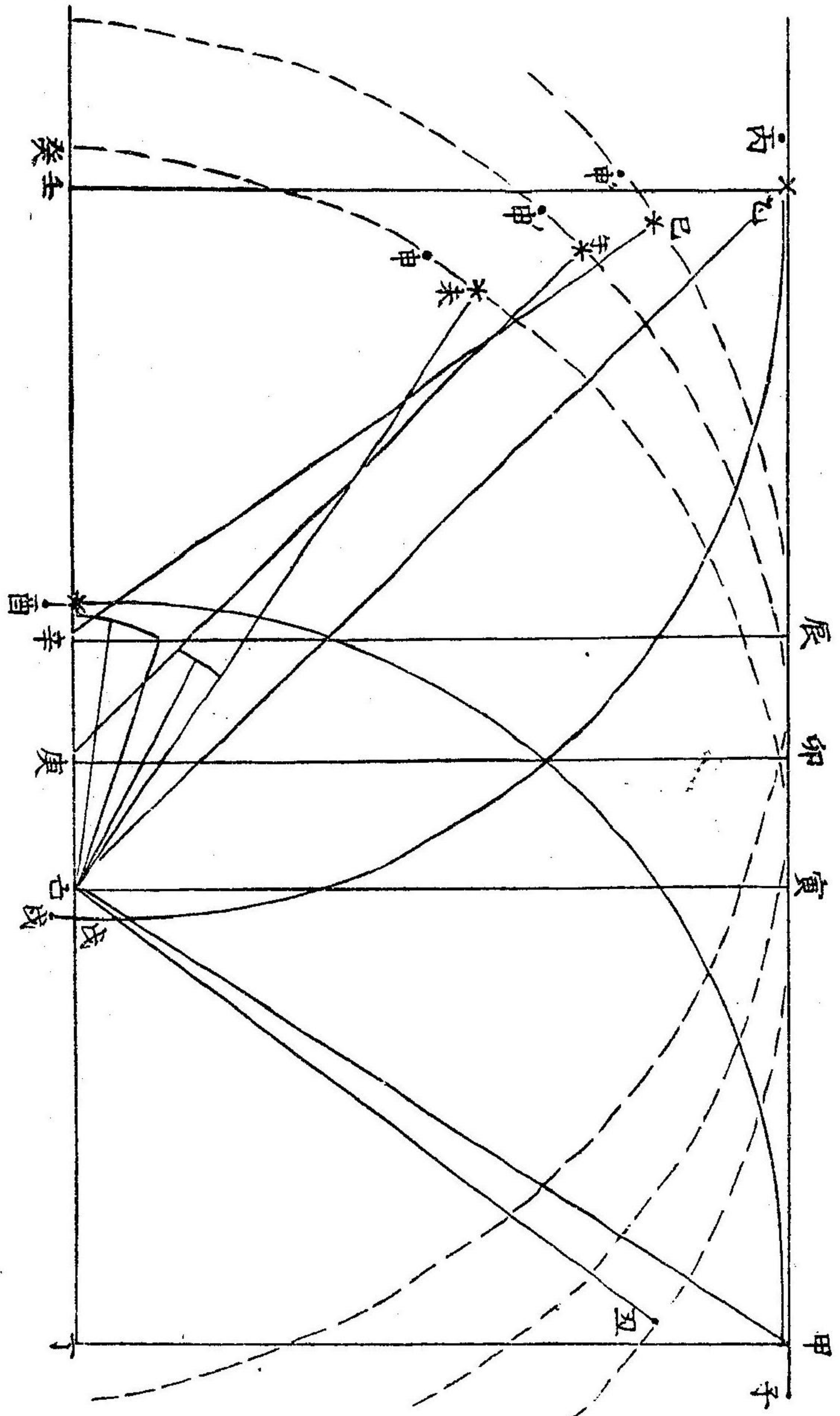
○又天体ヨリ來ル所ノ光線ハ吾人眸子ニ入來ル以前既ニ此風輪為  
 ノニ屈折セラレテ真位置ヲ見ルコト能ハス故ニ天體ノ東ヨリ昇リ西  
 ニ降ルハ真ノ昇ニアラス又真ノ降ニアラス凡地上同高ノ處ニ於テ遠天  
 ヲリ來リ遠天ニ去ルノミ而シテ太陽此眼界ニ入來ルヲ以テ日出トシ眼界  
 ヲ出ツルヲ以テ日没トス月及ヒ諸星ノ昇降モ皆之ニ同シ今眼界弯曲ノ理  
 ニヨリ極星ノ高低スル所以ヲ明サハ則テ左ノ如シ

○第十九圖ハ平坦ナル地面ニ於テ北極ノ高低ヲ測リ零度ヨリ其高ニ  
 十五度 西京ノ北  
 極高度 ニ至ルコトヲ示ス者ニシテ地面南北ノ距離共ニ同クシテ北  
 極高度ノ差亦同キコトヲ知ラシムルモノナリ○甲乙丙ノ線ハ即日本西京





第二十圖



ニ委スルカユヘニ其高サ零度ナリ又甲丙ノ直線ハ甲丙ニ屈折スルヲ  
 以テ丙ナル星ハ丙即丁癸ナル地平線下ニアリテ見ヘザルナリ○丁ナル  
 赤道ヨリ北二百八十二里ノ処即北緯十度ノ地即戊ニアリテ北極ヲ測望スル時  
 ハ則チ極星ヲ未ニ視ル是即其頂点子ヨリ北極迄ノ距離子乙ノ  
 直線屈折シテ子未トナリタルナリ而シテ茲ニハ北極ノ高サ十度ヲ測リ  
 得ル者トス己ニアリ庚ニアリテ午高サ二十度ト己高サ三十度ニ極星ヲ視ルモ皆  
 之ニ準ス○辛ナル西京ノ地ニテハ設シ風輪ノ差ナキハ辛乙ノ直  
 線ニ極星ヲ見ルヘキヤ古ナレ卯乙ハ卯癸ノ屈折線中卯辰ニアリ  
 故ニ極星ヲ辰ニ視テ其高サ三十五度トスルナリ  
 ○又第二十圖ハ西京ノ地ニアリテ天ノ赤道及ヒ北極等ヲ測望ス

ル象ヲ示ス即チ己ナル西京ノ地第十九圖ニ於テ西京ノ地ヲ示トス然レ共ニ相同シニ於テ乙ノ極星ヲ未  
 ニ視ルハ前圖ノ理ニ均シ而シテ甲ナル赤道赤道ニテ星ヲ以テ云フトキハ則チ甲ヲ星トスヲ丑即  
 高サ五十五度北極ヨリ赤道迄九十九度ノ内西京ノ緯度三十五度ヲ減セテ殘餘ノ度数ニ視ル設シ風輪ノ差ナキハ  
 ハ己甲ノ直線ニ見ルヘキ筈ナレハ風輪ノ作用ニテ寅甲ノ直線ヲ寅丑  
 ニ屈折セシニ由テナリ又北極以北ノ星丙ヲ望ムハ寅丙ノ屈折線中  
 ノ申ニ於テ之ヲ視ルヘシ○夫ヨリ庚五十五度ノ地ニ到リ辛五十五度ノ地ニ到リ極星ヲ午  
 ト己ニ視且丙ヲ申及ヒ申ニ視ルト亦前ニ準知スヘシ又設シ北極直  
 下ノ地壬ニ在テ測望スルハ赤道甲及ヒ赤道南ノ星子ヲ其屈折  
 線中戊ト戌トニ落下スルカユヘニ赤道ハ零度トナリ恰モ地平線ニ切シ  
 テ視ヘ戌ハ地平線下ニ没スルヲ以テ見ヘザル所ノ者トス

○蓋シ前二圖ニ於テハ共ニ赤道ヨリ北極直下ニ至ル間多九分シ十度ノ  
 差ヲ測驗スルヲ示ス雖然每一度ノ差ヲ檢スル者ト其理全ク相同シ  
 上卷第三圖ト照見參考スルトキハ則地面第十九圖ヲ見ヨ丁戌己庚等ノ如ク其  
 各点ノ距離同シテ極星高度ノ差モ亦同キハ平坦ナル地面ニ於テ風輪  
 ノ作用ニテ眼畧穹隆ノ理ヨリ生成シタル天象ナルヲ知ラハ渾天後説  
 者ガ極星ノ高低ヲ測リ地ヲ球體ト為セシ臆想ノ謬リナルヲ通曉ス  
 へシ

第七頃 決論西洋之地球説

○<sup>第十</sup>西洋ニテ地球説ノ發起スルヤ決シテ偶然突起セシ者ニアラス亦支那  
<sup>八節</sup>ニ於ケルカ如ク古説即多祿其流ノ日月水中ヨリ出没スルノ説久ク行ハレ  
 シ上人智ノ開進ニ從ヒ自ラ前説ノ鹵莽ヲ發見シ漸ク改正セシヨリ成レ  
 ル者ナリ而シテ上卷ニ述ヘタル如ク其首唱者ノ思想ヲ討覈スルハ今日  
 地球者流ノ言フ所ノ如キ者ニアラス故ニ迦世煩ハシク人口ニ唱フル地圓ノ  
 憑証ノ如キハ悉ク蛇足ノ譚ノミ然レトモ亦彼ノ狂入東走スレハ逐者モ  
 東スルノ風情止ムヲ得ス左ニ之ヲ辯明シテ尽ク其誤謬ヲ知ラシムテ  
 千歳ノ迷夢ヲ發覺セシムヘシ

○<sup>第十</sup>九節地圓証之一 地球家ニ地圓確証ト称スル者數多アリト雖モ先ツ

上卷ニ掲ケシ所ノ者ニ就テ逐一ニ之ヲ辯セントス

○地球者流ノ云ク試ニ望遠鏡ヲ以テ日月及諸遊星ヲ窺ヒ見ルニ皆  
 悉ク圓體ナレハ地球モ亦圓體ナレキハ自ラ臆度スルヲ得ヘシ況ンヤ現ニ  
 其確証アルオヤ即月蝕ノ如キハ地球ノ暗影月面ヲ遮蔽スル者ナル  
 ニ其暗影必ス圓ナレハ影ノ形ニ同シキハ論ヲ待タスシテ明ナリト

○辯シテ曰ク是レ俗ニ云フ頭上<sup>アタ</sup>カラ帽子ヲ被<sup>カ</sup>ムセルノ説ニシテ論スルニ  
 足ラス固ヨリ童蒙ヲ欺ク者ニ過キサレハ亦為<sup>シ</sup>ニ聊カ之ヲ辯セハ初ニ  
 日月諸星皆圓體ナレハ地モ亦圓體ナリト云是レ何ソ人ヲ欺クノ甚タシ  
 キヤ汝等ハ此地ヲ以テ其体日月ニ均シキモノト為ス故ニ此言ヲ吐露スト  
 雖モ一体ソノ日月ノ均シトスルコトハ地球体ト定メタル上ノ説ニシテ未タ

地ト日月ト其類同シキヤ否ヤヲ決定セサル以前ニ彼ノ日月ハ圓ナリ故ニ此  
 地モ圓ナリトハ抑々何ノ言ソヤ日月ハ球圓ナリ故ニ守モ馬モ球圓ナリト  
 云フニ何ソ異ナランヤ是レ此ヲ頭上<sup>アタ</sup>カテ帽子ヲ被ムセルノ証<sup>シロト</sup>ト云フ  
 ○次ニ月食ノ時月面ヲ遮蔽スル所ノ暗体ノ形團圓ナリ故ニ地ノ球圓ナル  
 ヲ知ルヘシト云汝等ハ汝等ノ外ニ天文ヲ談スル者ナシト思ヘルヤ我ガ家ニ  
 之ヲ羅睺星ノ月面ヲ遮蔽スル者ト為レハ地ノ形体ハ毫モ關係ナキ者  
 ナリ故ニ之ヲ以テ地圓ノ確証トスル<sup>ト</sup>甚謬ナリト知ルヘシ

○第十二節 地圓確証之二

○地球家謂ハク船艦ノ岸ヲ離レ漸ク遠ク去ルヲ見ルニ先ツ其船身  
 隠レテ見エス去ル<sup>ト</sup>又遠クシテ帆ノ下邊ヲ見ス去ル愈遠クシ

テ橋<sup>テ</sup>大ノ見エサルニ至ル云<sup>上卷第九</sup> 云<sup>第九</sup> 節ヲ見ヨ

○辯ニ曰ク是亦童蒙ヲ欺惑スルノ説ナリ何ントナレハ理學者ハ大氣  
 ノ地面ニ最モ厚ク高ニ昇ルニ從テ漸ク稀薄ナルヲ知リ又地面特ニ海面  
 ニハ水蒸氣ノ稠密ニシテ是亦上層ハ漸ク稀薄ナルヲ知レリ茲ニ論スル所  
 ノ帆檣岸港ノ顯象ハ悉ク大氣ト水蒸氣ノ所為ニシテ就中水蒸氣  
 ノ障礙ヲ為ス者最多トス此事秋露春靄ノ開散時ニ於テ高キ山頂  
 ヲ先ツ發露シ低キ山腰以下仍<sup>ホ</sup>見ルヘカテサレ景態ニテ甚タ明<sup>ク</sup>  
 ナル者ナリ地球者流モ固ヨリ之ヲ知ル莫<sup>ク</sup>ソ人ヲ愚<sup>ク</sup>スルノ甚シキヤ  
 設シ此理ヲ知ラスシテ此<sup>ト</sup>言ヲ為サハ夫レコソ實トニ愚漢ト謂ツヘシ

○第十二節 地圓確証之三

佛國遠天談上

地球家謂ク地球ノ圓體ナル實據ハ更ニ航海スル者ヲ以テ之ヲ言フ  
 ヘシ即某港ヨリ開帆シ終始同方位ニ向テ直駛スルトキハ東ニ行ク  
 モ西ニ馳スルモ皆當初程ヲ發セシ某港ニ還ルヘシ是則地球ヲ  
 運行一周スル者ナリ倘シ圓體ニ非サラシメハ固ヨリ應ニ此ノ如キ理  
 無カルヘシ

○此事例ハ我カ日本横濱ヨリ太平洋ノ飛脚船ニ乘込ミ直チニ東方  
 ニ向テ航海スルキハ米利堅ニ著シ仍方位ヲ變セステ東方ニ  
 進行スルトキハ竟ニ日本横濱ニ還ル是レ昔シ話<sup>ダ</sup>シヤ道理々密  
 計リテ述ヘルトニ非ス現ニ今亞米利加ニ到ル者ハ皆此ノ如ク五等  
 カ航海スルモ總テ此ノ通りナリ地面倘シ平坦ナラハ此ノ如キ

能ハス故ニ地ハ實ニ球圓ナリト云

○辯ニ曰ク是ハ西人ノ東洋入ヲ誑惑スル說ニアラス地球家即彼ノ井底  
 深坐ノ狹見ヨリ自己モ厚ク信シタル者ナリ

○<sup>第廿</sup>節右ノ迷夢ヲ發覺センコト唯平面ノ洋中環繞ノ一言ニ足ル  
 ヘシト雖モ世人ハ深クモ此夢境ニ陷入シ佛門社會ト雖モ該說ノ

辯解ニ窮シ腰拔ケニモ無須弥ヲ説話スル者アルニ至ル因テ人々初  
 ニ之ニ關シテ最緊要ナル者數件ヲ説明シ而シテ後詳カニ地球家ノ謬ヲ  
 正スヘシ

○<sup>第廿</sup>節常人ハ唯多クハ素眼ニテ視タル所ニ付テ說ヲ為ス故ニ動モス  
 レハ自己ノ實見セシ者ノミヲ以テコレ有リト為シ未タ現見セサル

所ノ物ニ至テハ縱令<sub>レ</sub>他ノ實驗ヲ經タルシ者ト雖モ決シテ信セザルコトアリ因テ親シク眼前迫小ノ者ヨリ追テ天地ノ遠大者ニ及ホシ唯素眼ニテ視ル所外別ニ種特異ノ景態アルコトヲ説明シ次ニ正シク緊要ノ數件ヲ示スヘシ

○<sub>第廿</sub>節何ヲ素眼所見ノ外特異ノ景態アリト云ヤ曰ク精眼見コレナリ又之ヲ天學入門ノ正眼見トモ名ツク○何ヲカ地球一周ノ說付キ要件數條トスルヤ曰ク磁石方位ト真方位等ナリ又磁石方位ヲ明カスニ付磁石ノ性質ト磁石ノ極トヲ説明シ真方位ヲ明カスニ付一三須彌界ノ真方位ヲ辯シニ閻浮洲見界ノ真方位ヲ辯シ

此下磁石ヲ以テ正午ヲ取ルノ誤及ヒ真ノ正午ヲホス 三ニ北極ノ所在ヲ辯シ以テ正シク地球說ノ要見

ヲ知覺セシムヘシ

○右ノ數條ニ明カナラサレハ以テ真ノ天文ヲ談スヘカラス苟モ是ニ明カナルトキハ則須彌界ノ形狀坐ナカラニシテ知ルヘシ是レ此ヲ要件數條ト名ツクル所以ナリ

○<sub>第廿</sub>五節精眼見

大鼓ハドトシ鐘ハカンカン鴉ガーく猫ニヤーく

人々ハ此立目色ニ於テハ平生聽慣レシヲ以テ真宅モ論スヘキコトナシト為スヘシ然レモ微コシク是ニ注意スルハ大ニ至要ナル感覺ヲ興起スヘシ抑ク鴉猫ノ鳴カサルナク鼓鐘ノ擊テサルナシ故ニ吾人ハ今日悉ク其色音ノ如何ヲ知ラサルナシト雖モ設シ閑關以來鴉猫ノ鳴キシコトナク鐘鼓ヲ擊テ鳴ラスコトナキ時ハ誰レカ能ク其鳴聲振立目ヲ

辯セニヤ○問フ開闢以來鳴カス振ハスハ絶テ其声立日ナシトセン  
 乎曰ク否庸人ハ鳴カス振ハスハ以テ其声立日ヲ辯セスト雖モ至  
 人ハ必ス鳴カスシテ其声ヲ知リ振ハスシテ其音ヲ辯ス○彼ノ世ノ澆  
 季ニ及ヒ人壽ノ短縮軀幹ノ矮小ナル人ハ之ヲ古今ニ照シ之歴史ニ  
 驗シテ始テ此ノ顯象ヲ知ルニ誰レカ曾テ數百千及ヒ方歳ノ  
 齡齒ヲ保ツ日ニ於テ後世此衰減ノ事跡アルヲ知ラニヤ唯我カ  
 佛世尊獨リ之ヲ豫知シ玉ヒシノミ

○前ニモ掲ケン如ク彼ノ顯微鏡ニテ水中ノ小蟲ヲ驗スルヤ實ニ  
 至微至小ノ蟲類ノ生活スル其數无慮幾千万トモ知ルハカラス庸人  
 ハ鏡カヲ藉リテ始テ之ヲ見ル故ニ此鏡ナケレバ今日西人ト雖モ亦之

ヲ見ルヲ能ハス我カ佛世尊ハ鏡カナドヲ藉ラスシテ能ク之ヲ見能  
 之ヲ知リ常ニ之ヲ殺スヲ戒ン玉フ是レ世人ノ能ク通知スル所ナレハ  
 多辯ヲ要セスシテ明カナリ夫レ顯微鏡ハ伊太利國ノガリレオ以來ノ製造  
 ナレハ僅カニ茲ニ三百年ナリ我カ佛世尊ハ既ニ三千年前顯微鏡ナキ世  
 ニ於テ只水中ノ小蟲ヲ看玉フクナラス人身ノ内外及ヒ一般ノ動植物  
 ノ内外ニ无量ノ動物ノ生活スルヲ知見シ玉フ諸經諸論ニ具説アリ誠ニ尊重ス  
 ヘキヲナラスヤ

○立世阿毘曇論地動品ニ後世地球及ヒ地動説ノ興起スルヲ懸記  
 シ玉ヒシ如キモ精眼ノ所見ニシテ右ノ三條共ニ天眼見ノ一端ナリト雖モ今故サラニ精眼見ト云ラ庸人知見表  
 ニ出ルモノナリ何ントナレハ世尊ノ在世地球説ナク彼ノ地田地動説首





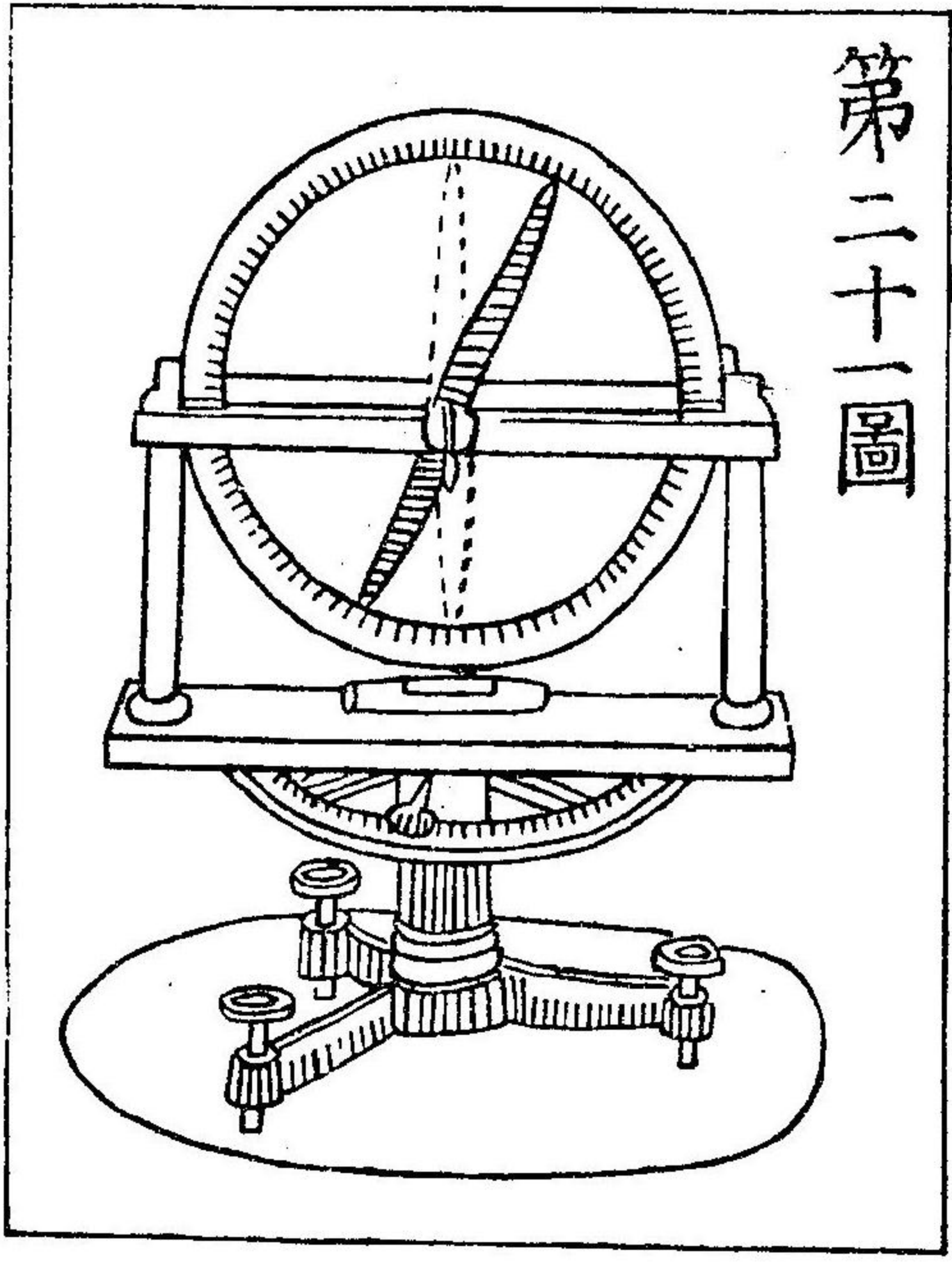
成リタル他ノ磁石ヲ以テ一片ノ鋼鉄ヲ摩擦シテ容易ニ割裂シ得ヘキ  
 モノニシテ即チ器械上用キル所ノ羅盤針等是ナリ  
具サナルハ物理学書ニ就テ之ヲ檢セヨ今ハ天文学ノ目的ニ感セカ為シ其大畧ヲ奉ルニ

○問 羅盤針ハ如何シテ製シタルモノヤ曰ク所謂磁石器ノ針ニ  
 モノハ磁石ニアラス鋼鉄ナリ而シテ他ノ人工磁石ヲ以テ摩擦シテ此鋼  
 鉄針ヲシテ磁石カヲ興起セシモノナリ○問フ 羅盤針ノ凡南北ノ  
 方位ヲ指示スハ如何ナル理ナルヤ曰ク理學家ノ實驗ニ據リ簡單  
 ニ之ヲ言ハハ凡ノ北方磁石ノ極即地下ニ磁石ノ大根株ナルモノアリテ  
 羅盤針ノ北端ハ是ト互ニ相吸引スルモノナリ

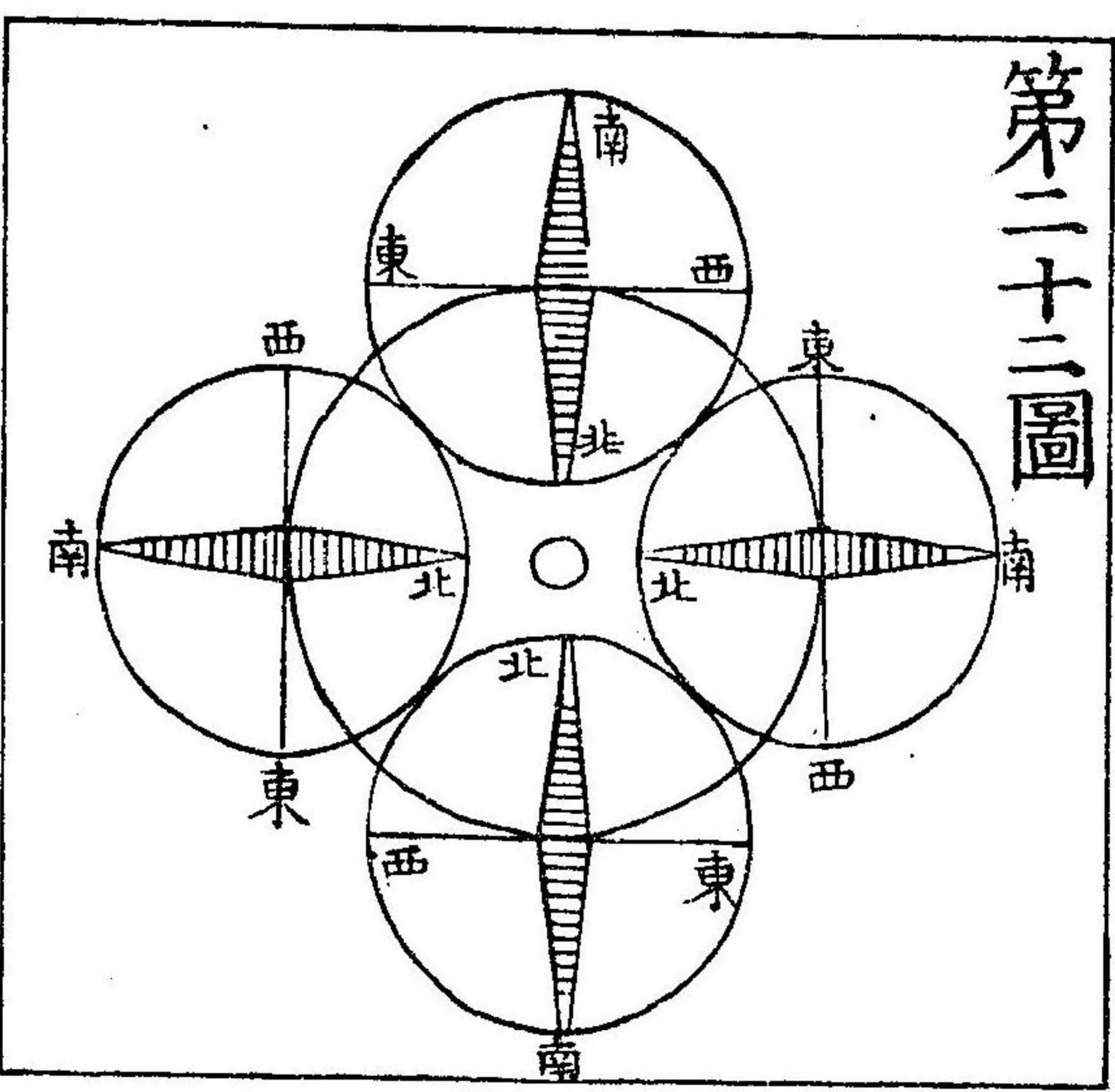
○第廿七節 磁石極 問フ磁石極ハ何處ニ在リヤ○答テ曰ク物理学書

ニ據ルニ英國高名ノ航海家ロツス氏一千八百三十一年六月四日第八  
 時始テ磁石極ニ到着セリ其地ハ北緯七十五度五分十七秒地ノ北極ヲ距ル七十  
四度五十四分四十三秒ナリ西經九十六度四十六分四十五秒ニシテ即チ亞米利加洲ノ  
 北方ニ於ケルメルウ井トル島上ニアリト云フ

第二十一圖



第二十二圖



○問フ何ヲ以テ此地ヲ磁石ノ極ト云フヤ答テ曰ク一義アリ曰ク磁針ノ傾針曰ク磁針ノ聚合ナリ傾針ハ第二十二圖ノ如キ磁針ヲ裝置セル器械ヲ以テ之ヲ檢スルニ赤道上ニテハ磁針毫モ傾斜ナク恰モ木<sup>木</sup>平<sup>平</sup>面<sup>面</sup>ニテリ漸ク北緯ノ地ニ進ムニ從ヒ磁針漸ク傾斜シ<sup>即</sup>針<sup>北端</sup>低<sup>下</sup>スル<sup>ヲ</sup>云<sup>終</sup>ニ極地ニ至テハ點線針ノ如ク直立ス故ニ此地ヲ以テ磁石ノ極トスルナリ○ニニ磁石ノ聚合トハ第二十四圖ノ如ク地面何レノ處ヨリ北行スルモ磁石ノ北端ハ悉ク此點ニ向テ聚合ス故ニ此地ヲ以テ磁石ノ極トスヘシ

○問フ磁石ハ何ノ國ナリ何ノ處ニ在ルモスヘテ此磁石極ノミヲ指示スルモノカ答テ曰ク太概此ノ如シト雖モ實地經驗說ニ據ルニ磁針

カ磁石極ノ一點ヲ隨在正指セサルハ無論天文學子ニ所謂真ノ北極<sup>後</sup>ナリヲ指サズシテ各國ノ地方ニヨリ或ハ東ニ偏<sup>カ</sup>ヨリ或ハ西ニ偏<sup>カ</sup>ヨリ之ヲ羅針偏倚ト云現ニ吾カ日本ハ亞細亞洲中磁石ノ西偏スル地方<sup>即磁針ノ北端真北ヨリ西方ヲ指ス</sup>ニシテ歐洲ハ魯西亞ノ小部ヲ除ク外皆西倚ノ國ナリ又亞非利加洲ノ南海<sup>南緯六十度西經八十度前後ノ地</sup>ニ在テハ東ニ偏スル一二十五度<sup>北</sup>兒蘭海ニ在テハ西ニ偏スル一四十度ノ甚タシキニ至ル其他各國相均シカラスト云フ

○又其東偏ノ地ト西偏ノ地トノ間ニ於テ磁針正北ヲ指示スルノ地アリ即南亞米利加東部ヨリ西印度ノ東方ヲ經テ北亞米利加洲セラベルヒア邦ノ辺傍ニ至リホドシ<sup>灣</sup>ヲ越ヘ北極<sup>地ノ北極即真地</sup>

ヲ貫穿シテ白海ノ東方ニ進ミ東海ヲ跨テ亞刺伯ノ東部ニ入り又轉シテ澳太利亞ノ方位ニ達シ南極ヲ通過シテ南亞米利加ノ東部ニ届ルカ如ク彎曲シテ地球ヲ一週スル線ニテ地球是ナリ之ヲ無偏度ノ地ト名ク而シテ此線以東ノ地ニ在テ磁針西偏シ以西ノ地ニ在テ東偏スル者ナリ以上物理然レ右ノ線ニテル処ニ磁針正北ヲ指シ其他悉ク西偏シ或ハ東偏スルモノナルヘシ

○按スルニ磁石極ナル者ハ即チ地中若干里ノ下ニアル磁石ノ大根株ニシテ此根株ヨリ諸方ニ磁石ノ枝條蔓延シ俗ニ金鐵曲直无究長クヘシ而シテ此枝條ノ正南北ニ延長セル地面ニ磁針モ亦之ニ感シテ其正北ヲ指示セ者多ヤ明カナリ

○右ノ如ク國處ニヨリ或ハ東偏西偏ニモ關セススヘテ磁針ノ指示スルモノヲ

名テ磁針方位ト云フ故ニ各國各處ニ於テ真方位ニ或ハ合シ或ハ合セス因テ航海者ハ豫テ此方位ヲ測知セサレハ大ニ行路ヲ謬ルヲ以テ航海術ニ於テ此方位ノ測量ヲ一ノ要課ト為ス

○第廿真方位 真方位トハ何ソヤ曰ク磁石ノ指示スル方位ニテラス所

謂北極ノ一点ヨリ吾カ居ル所ニ引キタル線ヲ子午線ト云フ此子午線ノ

方向ニ準スル者ヲ真方位ト云フナリ○問フ北極トハ何物ナルヤ答テ曰ク

北極トハ日月星辰ノ晝夜ニ回轉ヲ為ス回轉ノ中心ヲ天ノ北極ト云ヒ

此天極ノ直下ニ相當ル所ノ地面ノ一点ヲ地ノ北極ト云フ○問フ日月星

辰ハ天ノ如何ナル場處ヲ回轉スルヤ答テ曰ク日月星辰ノ回轉ニ真天ヲ

リ視天アリ真天ノ中心ヨリ立ツル所ヲ一須弥界ノ真方位トシ視天ノ

中心ヨリ立ツル所ヲ縮象見界ノ真方位ト名ク充ニ於テ之ヲ辯スヘシ

○第廿九節須弥界 真方位 須弥界ノ全象ハ第三編ニ至テ詳説スヘシ

故ニ茲ニ六只方位ヲ示ス所ノ自的ニ關スル者ノクヲ考テ之ヲ陳述セントス

夫レ平坦ナル世界ノ中心ニ須弥山アリテ廣高共ニ八万由旬ナリ此大山ノ

外ヲ圍繞スル七山アリテ廣高漸次ニ半減ナリ此七山及中心ノ須弥山ノ間ニ

各々海水アリテ其廣深亦各々其山ノ廣高量ニ均シテ此第八山ノ外ニ

ハ鹹水ノ大海アリ吾人ノ般ニ航スル所ノ海洋即是ナリ其外周ニ山アリ鉄輪圍山ト名ク是レ世界

ノ惣外堤ナリ之ヲ合シテ九山八海ト稱シ之ヲ須弥界ト云フ

○須弥山ノ四方ニ當リ右第八ノ大鹹海中ニ各嶋洲一大洲ニ中洲五百ノ小洲等ナリアリ之

ヲ須弥ノ四大洲ト云吾人ノ生活スル處ハ須弥ノ南海ニアリ故ニ南洲云フ

而シテ其大洲即亞細亞阿非利加歐羅巴ノ三大洲也ヲ閻浮提又ハ瞻浮ト名ク今西人名ヅクル

所ノ亞米利加洲勝捕牛洲ト名クト澳大利亞洲猫牛洲ト名クトハ其二中洲ナリ蓋シ日月

星辰ハ常ニ須弥山ヲ中心トシ九万由旬ノ高三於テ晝夜回轉スルモノナリ

單ニ南洲ノ天ノミヲ回轉スル所ノ星アリ故ニ日月回轉ノ中心即チ天地ノ極即回轉ハ須弥心ナリ

因テ此須弥心ヨリ五口カ居ル處ニ線ヲ劃シテ之ヲ子午線ト為シ之ヲ

南北ノ真方位ト云フ

○此事立世阿毘曇論第十九日月行品ニ曰ク須弥山王在四天下之

中央云何須弥山在四天下北邊所謂隨日行分判東弗婆提東方

是南閻浮提北方東弗婆提西方是南閻浮提南方東弗婆提

北方是南閻浮提西方東弗婆提南方是南閻浮提東方北鬱

單越西瞿耶丘亦復如是南閻浮提北鬱尉單越正對東弗婆提西  
瞿耶丘正對ト是レ此ヲ一須弥界之真方位ト云フ

○第三南洲見界之真方位 南洲ト即チ吾人生活シ來往シ得ル所

ノ世界ヲ云フ也三南洲見界トハ吾人ハ須弥ノ四洲ニ來往シ能ハサルハ勿論且

須弥ノ周圍ヲ回轉スル所ノ天体觀ヲ其終見レト能ハスシテ只此南海嶋

ノ天ヲ回轉スル所ノ天象日月星辰ヲ視レ之ヲ南洲ノ見界ト云フ曾テ普門

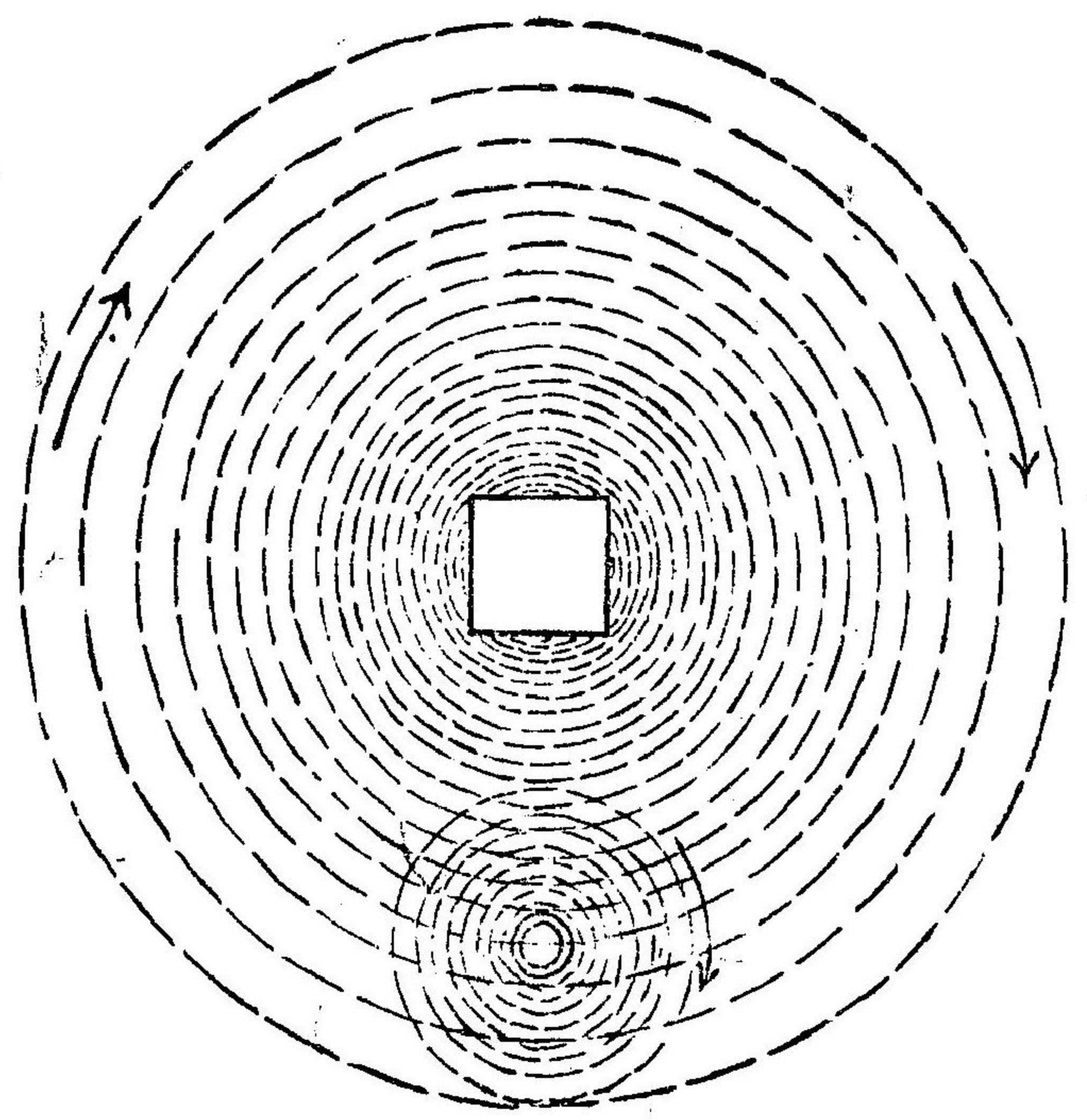
律師ト去人縮象見界ト称セレレシ者即是ナリ

○日月星ハ元ト徒行禪セス乃チ五種ノ風輪ニ拱持推轉セラレテ運行

スル者ナリ而シテ此風輪ニアリ曰ク總風輪曰ク別風輪ナリ而シテ總風

輪ハ須弥界ヲ抱圍シテ三光ヲ拱持シテ須弥山ノ周圍ヲ回轉セシレ別

第二十三圖



風輪ハ只南洲上ニアリ總風輪上ニ在ル所ノ光ヲ五口カ輪上ニ照影セシ  
メテ以テ晝夜ニ一回轉ヲナシ日月星辰ヲ五大洲ノ西云所ノ上ニク在リ  
ト視セシムル所ノ者ナリ五大洲ノヲ  
以テ論ス

○風輪ノトハ第四編ニ於テ詳説スヘシト雖モ今略シテ其形狀ヲ示  
サハ右圖ノ如シ乃チ甲乙丙丁ノ大圈ハ總風輪ニシテ子卯午酉ノ小  
圈ハ別風輪ナリ又子卯午酉ノ最小圈ハ別風輪ノ較中心ニ近ク日月  
ノ回輪スル視圈ナリ即チ經論ニ日月廻照輪ト説キ普通ノ天文學  
ニ天ノ赤道ト云モノ是レナリ例ヘハ真太陽ハ總風輪上ノ甲点ニ在ルトキ  
吾人ハ別風輪上ノ子点ニ視太陽ノ光ヲ見真太陽總風輪上ノ箭ヲ以テ示  
セシ方位ヲ以テ回轉シテ乙ニ到ルキハ別風輪上ノ視太陽ハ即卯ニアリ丙ニ

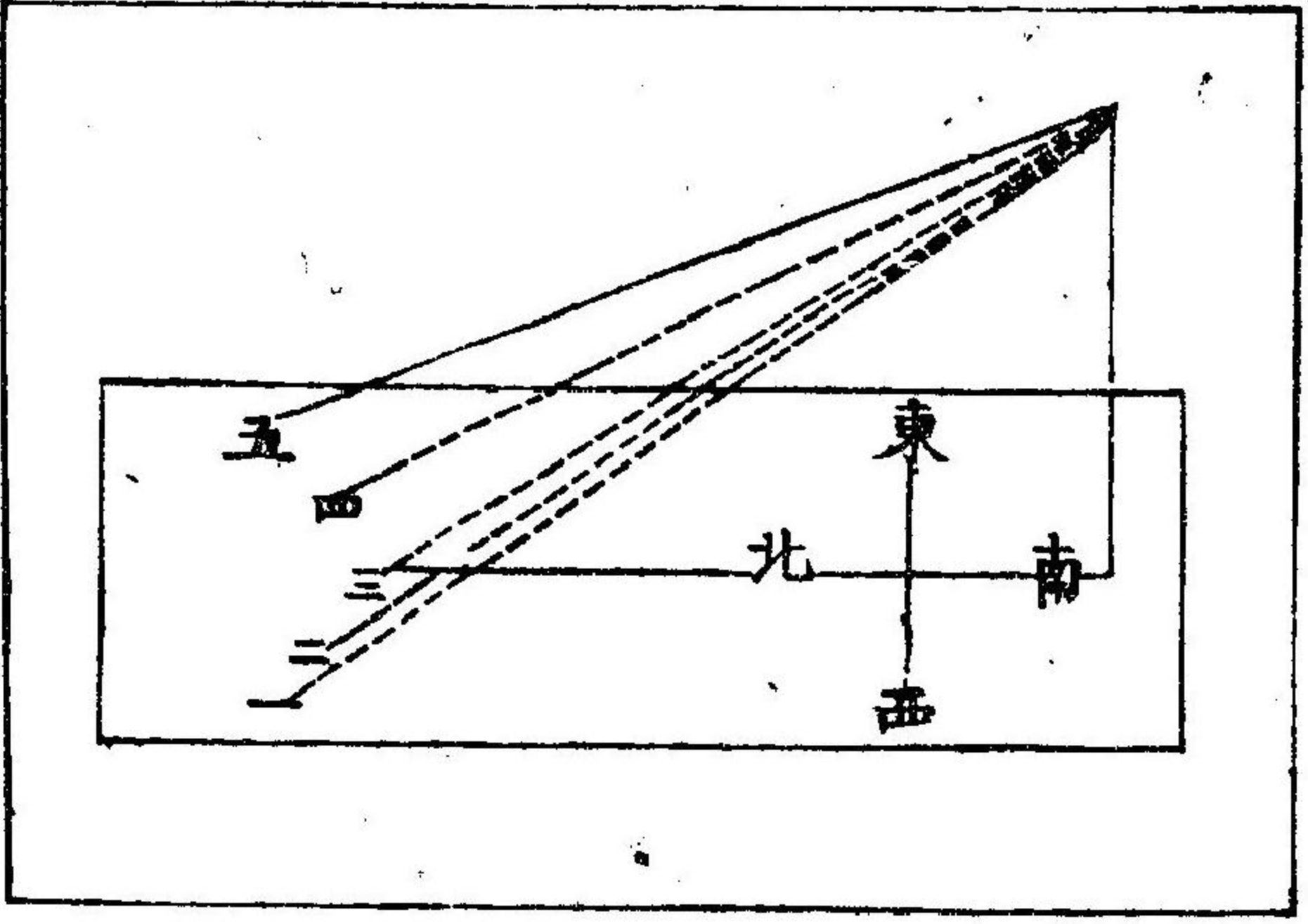
アリ丁ニアル真太陽ヲ午ニ視酉ニ視ルモ皆之ニ準ス

○問フ風輪ノ回轉スルハ何ユヘ答テ曰ク佛説ニ於テハ世界ノ動靜悉  
皆有情ノ業增長カヲ以テ因縁トスルノ常ニシテ彼ノ造物主ノ私  
力及ヒ引カ吸カ等ノ所為ト称スル妄説ト固ヨリ同床ノ論ニアラス  
○問フ日月星辰ハ悉ク須弥ノ周圍ヲ回轉スルヤ答テ曰ク然ラス日  
月及北極ニ遠キ星辰ハ總風輪上ニ於テ須弥ノ周圍ヲ回轉スト  
雖モ北極ニ近キ恒星例ヘハ北極星ト名ツクル者及ヒ北斗七星等  
ハ單ニ南洲ノ天空ニクアリ決シテ須弥ノ周圍ヲ回轉セス  
○右ノ如ク日月諸星ハ或ハ須弥ヲ繞クノ或ハ北極ノ周圍ニク  
繞クルトノ差違アリト雖モ別風輪上ニ照影スルニ及テハ吾人

ヲシテ恰モ共ニ極心ヲ週廻スルモノト視セ令ル者ナリ是ヲ縮  
 小見界ノ天象ト云フ故ニ其ニ光週廻ノ天心即樞軸ノ一点ハ  
 即チ地ノ北極ナルヲ前ニ述ヘタルガ如シ因テ此極ノ一点ヨリ吾カ  
 居ル処ニ引キタル直線ノ方向ヲ南北真方位トスルヲ亦前ニ記スルカ  
 如シ

○<sup>第世</sup>真方位ノ測法 磁石極ト地ノ極トハ其差ヒ凡十五度ニシテ  
 磁石ノ指示スル所ノ方位ハ真方位ニアサルヲ前ニ述ヘタルガ如シ然  
 ラハ真方位ハ如何シテ之ヲ決定スヘキヤ云ニ其測法數種アリト  
 雖モ最簡易ナル一法ヲ示サカ九圖ノ如ク表木ヲ机上ニ樹テ日  
 影ヲ取ルニアリ先ツ水準（水）ヲ以テ机面モ正平ナラシメ表木ヲ之ニ

第二十四圖



直立セシメテ日影ヲ視ルニ設ヒ午前十  
 一時頃ノ表影ハ(一)ニアリ向ニ十分ハ(二)  
 アリ十二時頃ハ(三)ニアリ又午後〇時三  
 十分頃ノ表影ハ(四)点ニアリ一時頃ハ(五)  
 点各各其処ニ点ヲ記シ其各点ヨ  
 リ表木ノ心迄直線ヲ引クキハ(三)点ノ  
 直線最短シ是レ太陽地平上アリ最  
 高ノ点即チ表木ヲ經テ天地ノ極心ニ對向スル時ニハ此(三)点ヨリ表心  
 ニ引キタル線ヲ真ノ南北線トス（脚）而シテ之直交シテ引キタル者ハ  
 東西線ナリ是レ此ヲ真方位ト名ツクルナリ

○前ニ記セシ如ク我カ日本ハ西偏三度半ノ國ナレハ磁針ノ北端ハ此南北線ノ西脚ヲ指示スモノナリ故ニ人常ニ日影ト磁針ト平行スルヲ以テ正午ト為ス者ハ謬ナリ真正午ヲ取ント欲クハ必ス此真方位ヲ以テセサルヘカラス是レ磁石方位ト真方位ト差フ所以ナリ

○第卅節北極ノ所在 問云ク右ノ説ニ據ルトキハ北極ノ一点即北極星

亦簡ニ從テ天ノ極軸ノ一点ト極星ト論スノ地球家ノ言ヲトコロト同ク日本西京北緯三十五度ヨリ僅カ道程

直径ニテ一千五百五十里ナル北地ノ即一度ノ里數ニ千八里ニ分チ十五度ニ乘シタルモノ天頂ニアルハシ然

ルニ佛者古來北極即北極星ヲ以テ或ハ須弥頂ニアリトシ或ハ七金山ノ第

二山或ハ第三山頂ニアリト云ヒ或ハ量ルヘカラスル遠天ニアリ等トシ

シハ謬リナリヤ○答テ曰ク先輩ノ所論其ハ意量リ難シト雖モ予ハ

佛經正法念經ニ觀天品北極ハ閻浮提北ニアリト説ケルノミテ何山頂ニアリ氏無キ

者ト是レ據又今口ノ實驗ヲ以テ赤道直下即北極地平ニ切テ零度ナル地ナリヨリ同比例ニテ

ニ分ク北行シテ北極モ度ツ北極ノ高サ八十度邊迄測量シ得ルハ既ニ吾人ハ北

極ヲ距ル僅カ十度即二百八十二里ノ処ニテ迎ツキ得ルト是レ據ノ一事ヲ以テ

斷然北極星ノ矢張り地球家ガ言フ所ノ天頂ニアルコト決定セリ

○第卅節決論地球一週之説 既ニ磁石極及天地北極ノ説示シ全須弥界

即須弥ノ周圍ヲ回轉スル日月星辰カ總別ニ風輪ノ媒約ニテ閻浮洲ノ縮

象トナル理由ヲ説明セリ是ニ據テ之ヲ觀レハ彼同方位ニ進行シテ五大

洲ヲ週シ得ル者ヲ以テ地体ヲ球圓ト為ス誤謬トヤ自ラ明カナリ何ント

ナレハ第二十四圖ニ於テ見ル如ク磁針ノ北端ハ常ニ磁石極ニ傾向スルモノナ



レハ平坦ナル地面ニ於テ同方位ニ向テ海上陸地モ亦同之ヲ回轉シ得ヘケハナリ是レ也○又二十  
 三圖ニ於テ視ル如ク別風輪中半點ニ亞非利加等ヲ置キ亞米利加ヲ西點  
 ニ置キ吾カ日本ヲ卯點ニ在リトスルガ同ク日出ノ方位輒或ハ同ク日没ノ方位  
 西ニ進行シテ五大洲ヲ一週シ得レハナリ是レニ

○第廿節或ハ須弥界ヲ難シテ云ク須弥説ニ於テハ須弥ノ周圍ヲ太陽ノ一回  
 轉スルヲ以テ一昼夜ト為ス故ニ南洲ノ日没ノ太陽ハ西洲ノ中央ニアリ南洲夜  
 半ノ太陽ハ北洲ノ中央ニアリ東洲ノ中央ヲ過クル太陽ヲ以テ南洲ノ日出トス  
 ルコト諸經論ニ云フ所ノ如シ故ニ日本ニテ夜半ノ時ハ同ク南洲ノ中ナレハ五  
 大洲モ共ニ夜半ナルヘキヤ論ヲ待タス即太陽ハ須弥山ノ北邊ニアリテ嘗  
 テ南洲上ニ在ラサルコト明カナリ然ルニ實地ニ於テハ然ラス日本日没時ノ

太陽ハ英國ニテ南中シ日本夜半ノ太陽ハ須弥ノ北邊ニ到ラスシテ却テ亞  
 米利加洲ノ頂上ニアリ又日本日出時ノ太陽ハ太平洋海上ニアリ故ニ須弥  
 界説ハ妄誕ニシテ地ハ實ニ球圓ナリト之ヲ日本ト米洲トノ晝  
 夜及對ノ難ト云フ○此難ヲ通セン  
 トシテ先輩或ハ直チニ右ノ實地説ヲ虛妄トシテ取ラス或ハ日本ト英國  
 及米洲トハ此ノ如キ時差チシ何トナレハ月蝕ノ時之ヲ視ルコト五大洲同時  
 同刻ニハ太陽ヲ見ルモ亦大差ナク日本夜半ナルハ五大洲共ニ夜半ナリト  
 此事先輩或ハ為シスルトコト有テ言ヒシナルヘシト雖モ予ハ斷然右ノ總  
 別風輪ノ視象ヲ以テ之ヲ談ス故ニ該難亦地球圓ニハ毫モ關係ナキモ  
 ノナルコト明カナリ

○第廿節餘論 右ノ如クナル時ハモ地球體ナルコトヲ証スヘキモノナシ唯地

球ノ説ハ彼ノ日月水中ヨリ出沒スルノ野蠻説ヨリ改正シ來リ又一回  
 地球體論ヲ發セシヨリ一ノ確証モナキニ只論端ノ捷便ナルヨリ竟ニ地  
 動説ト變化セシモノタルヤ前論ノ如シ故ニ上卷帽頭ニ一犬嘔吐テ又  
 實ヲ傳フト云亦宜ヘテラスヤ○人々ハ方犬ノ衆論多端ナルモ一犬嘔ニ就テ  
 其實ヲ正サハ當ニ熱液ヲ以テ氷塊ニ灌ガガ如キノミニテアザルコトヲ知ヘシ  
 今亦然リ地球説ノ首唱者ニ就テ之ヲ質シ加之衆議紛紜タル球體ノ  
 証ナリト呼ヒ來リシ者悉ク立タサル片ハ久ク猶擲ヲ逞フシ廣ク人心ヲ  
 動カセシ地圓地動説モ立地ニ氣蒸トナリテ消散スヘシ

佛國真天談下畢

明治十八年五月五日出版御届  
 同年五月廿六日刻成發允

定價金二十五錢



新瀉縣平民  
 著者兼  
 出版人 渡邊龍潭

下京區第二十三組若松町  
 十八番戶寄留

京都府平民  
 發允人 西村七兵衛

下京區第三十組中珠數屋町  
 烏丸東入二十人講町二十二番戶

